

陸羯南における国民主義の制度構想（十・完）

山 本 隆 基*

目 次

- (1) はじめに—国民主義・適中主義と制度構想—
- (2) 明治維新の課題と現実
 - ① 明治維新と国民主義
 - ② 官僚制発展の光と影
 - ③ 国民勢力の台頭（以上、本誌第 48 巻第 3・4 号）
- (3) 第二維新と国民主義の制度構想
 - ① 中間考察—国民主義の国家観—
 - (i) 積極国家 (ii) 積極政策 (iii) 行政国家
 - (iv) 権力分立
 - ② 官僚制と議会
 - (i) 官僚制と議会の分立 (ii) 予算案修正問題に関して
 - (iii) 政府・自由党接近問題に関して
 - (iv) 初期議会観（以上、本誌第 49 巻第 1 号）
 - ③ 議会と政党
 - (i) 議会と政党 (ii) 大同団結運動
 - (iii) 初期議会前の自由党と立憲改進黨
 - (iv) 初期議会期の自由党と立憲改進黨
 - (v) 政党構想—政策政党の政策連合（以上、本誌第 49 巻第 2 号）
 - ④ 議会と選挙
 - (i) 国民主義と選挙
 - (ii) 直接・制限選挙と自由選挙

* 福岡大学法学部教授

- (iii) 衆議院議員選挙評
- (iv) 議会・政党・選挙（以上、本誌第 49 巻第 3・4 号）
- ⑤ 中間団体（その 1）—地方団体
 - (i) 国民主義と地方団体
 - (ii) 市制町村制・府県制郡制・行政裁判所
 - (iii) 官民軋轢・大同団結・実業者
 - (IV) 構想と現実—政府・官僚制・政党に対する批判
（以上、本誌第 50 巻第 2 号）
- ⑥ 中間団体（その 2）—社会団体
 - (i) 国民主義と社会団体
 - (ii) 実業団体と農商務省
 - (iii) 実業団体と政党
 - (iv) 中間団体と国民主義（以上、本誌第 50 巻第 3 号）
- ⑦ 内閣政治
 - (i) 国民主義と内閣政治—内閣統治権論と内閣責任論
 - (ii) 政党・官僚内閣積勢論
 - (iii) 大同団結運動と政党内閣論
 - (iv) 初期議会と官僚内閣論
 - (v) 制度の構想と制度の現実（以上、本誌第 52 巻第 1 号）
- (4) 第二維新と国民的天皇政
 - ① 本節の課題
 - ② 朝野の功利主義思潮に対する批判
 - ③ 国民的天皇政の提唱
 - (i) 天皇統治権—主権・執中権・精神的融和力
 - (ii) 神道思想（その 1）—皇統の万世一系性・神聖性
 - (iii) 神道思想（その 2）—道德神道と政教分離（以上、本誌第 53 巻第 4 号）
 - (iv) 神道思想（その 3）—習合神道：中国・西洋思想の導入と功利主義思潮の修正
 - (v) 神道思想（その 4）—国民神道
 - (vi) 国民的天皇政—天皇・神道思想と制度構想論の協働
（以上、本誌第 56 巻第 1 号）
- (5) 結び
 - ① 制度構想と国民主義・適中主義
 - ② 国民主義と世界主義—ルソー自然状態論への共鳴と朝鮮国民主義への共感
（以上、本号）

（5）結び

① 制度構想と国民主義・適中主義

本稿を結ぶ段に立ち至った。先ず、これまで試みて来た作業を、若干の新知見も加えて整理して見たい。羯南は明治 24 年に出した「近時政論考」と「近時憲法考」の中で、明治維新时期以来の政治思想や政治改革の展開・変遷を総括し、さらに、フランス革命とナポレオン戦争後の西欧の新政治思潮に学びつつ、国民主義の政治思想を明治 20 年代の「新論派」（『陸羯南全集・第一巻』みすず書房、69 頁、以下、1-69 と略記）たる自負を持って提起した。そして、その眼目が、16 世紀の大航海時代に端を発し、19 世紀の阿片戦争によって本格化した西洋諸国の東北アジアに対する帝国主義的侵攻から日本国民の独立を確保するために、日本国民の政治的統一の確立を目指す点にある旨を説いた。しかし、羯南は、国民主義の課題が、明治 20 年代初頭に、突如として出現したと見ていたわけではない。彼は、上記の対外観を踏まえて、国民主義思想は、20 年前の明治維新时期に打ち出され、明治維新の諸変革は、国民主義を実現して行く第一の画期であったと理解した。彼は、明治維新が、幕藩体制の解体と廃藩置県の断行によって統一国家の形成の礎を築き、国民主義の実現に大きく寄与したと捉えた⁽¹⁾。彼は、「革命（明治維新－筆者）は国民勢力の一つである」（1-565）と述べている。しかし同時に羯南は、廃藩置県以降の政治思想や制度改革の推移を回顧し、それらが、必ずしも、国民主義の十全なる実現に適う形で進んで来なかったと考えた。彼が上記の両書を世に問うて、国民主義思想を改めて唱導した動機がそこにあった。かくして羯南は、明治 20 年代初頭を、明治維新の課題を継承・成就すべき「第二維新」（1-551・633・640・658・676、2-33・281・352・367・368）の時期と呼んだのである⁽²⁾。

それでは、「第二維新」は、何を課題とするのか。羯南は、明治維新と「第二維新」との間には、国民主義の実現という共通の目的を達成する為の具体的課題に関して、相違が存在すると見た。彼は、前者を「革命の値ある政期」、後者を、「平常の政期」と捉えた(1-80)。前者が王政復古クーデター、戊辰戦争、廃藩置県など、旧来の幕藩体制の破壊作業を旨としたのに対し、後者は、幕藩体制に代わる新国家体制の建設作業を課題とすると理解された。また、羯南は、斯様な二つの維新の相違について、「改革から構成へ」(2-74)、「批判から適用の時代へ」(2-94)「破壊から構成へ」(3-537)、等々の同趣旨の表現でも示している。そして、羯南は、両維新の課題の相違に照応して、夫々の維新を導く国民主義の思考法にも相違があるべきと考えた。彼は、論説、「言論の二大時期」の中で、言論の在り方、つまり思惟方法に関して、「絶対的理論の演繹」と「相關的議論」の二つを区分している(参照、1-658)。羯南は、この区分を基に、旧秩序の破壊を旨とした明治維新は、絶対主義的思考法を必要としたが、新秩序の建設を目的とする第二維新は、相關主義的思考法を必要とする旨を主張した。羯南は、「革命の政期」には、絶対主義的議論が必要であることを認める。「大革新大破壊の前後には国中の士論唯だ積極と消極の二派に分裂するに過ぎず。」(1-38)「旧慣俚習を『自由』の敵と為し繁文褥礼を『実利』の賊と為す所の思想は、社会激変の時代に在りて一たびは流行すること必然なるべし。」(3-365)そして、羯南は、相關主義的思考法的具体相について、次のように解説している。

「・・・吾輩は自由主義固より之に味方すべし。然れども吾輩の眼中には干涉主義もあり、又進歩主義もあり、保守主義もあり、又た平民主義もあり、貴族主義もあり、各々其の適当の点に据置きて吾輩は社交及び政治の問題を裁断すべし。」(1-25)

第二維新に臨む羯南の思考態度は、種々の特定の思想極の一方を純粹に固守する呈の者ではなく、諸々の思想軸の両極の間で、柔軟に「社交及び政治の問題」を考察・判断する呈のものであった⁽³⁾。そして、本稿では、羯南の斯様な思考法を、彼の思想的同志であった政教社が刊行した雑誌、『日本人』に加賀秀一が寄稿した論説、「憂国の士は適中主義に拠るべし⁽⁴⁾」の言葉採って、適中主義と呼んで叙述を進めた。

羯南は、明治維新で提起された国民主義の完遂を目指す第二維新は、明治維新期の絶対主義的思考法を排して、適中主義の相関主義的思考法を取るべき旨を唱えた。そして彼は、適中主義の立場から、日本国民の統一と独立を確保するために、「政体上」の問題よりも寧ろ、「政務上」の問題を重視すべきことを主張して行った（2-353）。彼は明治10年代の明治政府と民権運動の対立と分裂が、絶対主義的な思考法による政体論偏重に拠ると見たのである。自由民権陣営が人民主権論を掲げて政党政治・議会政治を主張し、他方、明治政府陣営は君主主権を掲げて官僚政治の徹底を叫ぶといった呈の両陣営の対決が、国民の分裂と対立を招来したと批判した。第二維新に当たって必要とされるのは、實際的・具体的な政務論の展開である。彼は、政治の世界は、「空言空名の競走場」ではなく、「国の生存及發育を目的として其の実行方法を争ふ所の実務場」であるべきと述べた（2-656）。また、「吾輩が政治の改良を望むは、哲學的改良を望むに非ずして、實益的改良を望むのみ」（2-794）とも言っている。また、羯南の同志、三宅雪嶺も、明治20年代初頭の政治思想の特色について、「如何なる主義であるかよりも、いかにして種々の問題を解決するかが主になる⁽⁵⁾」と指摘している。適中主義の立場は、言うなれば、教条的なイデオロギーの眼鏡を外して、現実的・具体的問題の処理に当たることの重要性を説いた。斯様にして、適中主義の立場は、現実分析と理想構想の中間地点に政策立案という領域を設定し、これ等の三領域の区別と連関に留意して論を立てる所に特色がある。羯南は、明治

政府の現実主義と民権陣営の理想主義の狭間において、「制度・政策論」（松下圭一）の重要性を唱えたのである。羯南が第二維新の遂行を課題として提起した国民主義の政治思想は、適中主義の思考法を介して、政治制度論と政治政策論を重要な要素として持つことになる。第二維新において展開すべき政治論は、国家論・政治革命論ではなく、政治過程論・政治政策論となる。

羯南は、国民主義の立場から、明治維新の革命的な政体変更、つまり、地域的・身分的な分散・分裂の体系であった幕藩体制の解体を評価した。幕藩体制の崩壊の後、廃藩置県に端を発する官僚制度の創設・整備の作業が進行した。そして羯南は、20年間に渉る官僚制度の発展が、国民の統一と言う国民主義の課題に適う面を持つことを認めた。その点で、彼は自由民権運動家の官僚制批判には与しなかった。しかし、他方、その結果、過度の官僚主導政治が出現した点については、国民の統一を阻害するものと批判した。

「蓋し国力の発達文明の進歩は国家を組成する各要素各社会能く均同調和の運動をなすに在りて、一要素独り運動し一社会独り行進するときは、遂に全部の衰弊を來たすものなり。從來官吏社会独り榮利の midpoint となりたるは国民の勢力政治の一方に傾注したりし為めに於て、其の結果は遂に政治機能独り他の社会に不適合なる張大を來し、他の社会の発達進歩を妨げしこと如何にぞや。是れ猶ほ全身の血液多く脳部に吸集せられ、却て支体の榮養を害せしに異ならず。⁽⁶⁾」(2472)

此の引用文は、直接的には、官僚政治の弊害を告発した者であるが、「一要素独り運動し一社会独り行進するときは・・・」という文言は、議会・政党中心政治に対しても向けられている。羯南は、それに対して、「国家を組成する各要素各社会能く均同調和の運動をなす」という文章によって、自らの制度構想の基本線を提示した。そして彼は、官僚制度と官僚勢力の有用性を認めると共に、官僚一元政治を是正する為に、内閣、議会（衆議院と貴族

院）・政党、選挙、地方自治制・社会团体など、極めて多元的な政治制度とそれを担う政治アクターの存在・活動とそれら相互の有機的連携が重要である旨を力説した。ここに、羯南の制度構想論の特色が見られる。本稿は、羯南の多元的な政治制度や政治アクターに関する分析・評価を、大同団結運動期から日清戦争期に至る数年間の政治・社会過程の展開と絡みせながら考察した。ここでその詳細を再説することは、勿論、出来ないが、彼は、夫々の制度がそれらを担う政治アクターによって夫々の本来且つ固有の機能を果たし、それらが有機的に関連し合って、日本国家の政策・立法過程が円滑且つ有効に作動することを期待した。例えば、羯南は、議会が開設されても、法案や予算の発案権は、行政権と共に、官僚制に帰属すべき者と考えた。議会の権限は法案や予算の審議権と行政活動の監督権にあるとされた。そして、国家レベルの政治過程を下から支える者として、選挙制度、地方自治団体、そして新興の実業者団体を初めとする種々の社会団体の活動に期待した。地方自治制論に於いては、分権よりも自治が重視された。選挙制度に関しては、選挙権の拡大が主張された。しかし、過度の輿論政治は否定され、輿論の突出は戒められた。さらに、社会团体が官僚制の諮問機関として政治参加していく制度の創設が提案された。そして、官僚制と議会の間を取り持って、政治過程の全体を総括し、謂わば、日本の国家意思を作り出す機関として、天皇統治権の執行者たる内閣が位置づけられた。そして、羯南は、政党内閣を理想としたが、「積勢」つまり政策力・政治力の実績からして、当面、官僚内閣の存続を主張した。この様にして、羯南の立論は、日本の政治制度と政治過程の双方に、そして両者の連関に目配りをした展開になっているわけである。羯南が制度構想の問題に甚大の関心を持ち、社会团体までも含む具体的・多元的な制度構想を展開していたことは、注目すべきことである。斯様にして、羯南は「第二維新」の中心課題が官僚中心政治を是正し、多元的な政治制度の構築と、それを担う多元的な政治アクターの形成に

ある旨を主張して行ったのである。彼は、此の課題を遂行する上で、内閣制度創設、憲法制定、議会開設、地方制度整備などの明治政府による一群の制度改革が好機と成り得ると捉えた。彼は、此の機を捉えて、明治維新以降の我が国の国是が国民主義である旨を主張し、その実現方を目指したのである。

羯南の制度構想論・政治アクター論は、国民主義思想の重要な契機でありながらも、これまで必ずしも、本格的には考察されて来たとは言えない。本稿で私は、この点に関する考察を試みた。その際、特に、羯南の多元的な制度構想と政治アクター論の全体を出来るだけ網羅的に且つ、それらの諸要素の相互の連関に留意して検討することに努めた。此の作業を通して、国民主義と適中主義という羯南の政論活動の二つの中心的道具立ての具体的内実が如何なる者であるかを明らかにした。彼の政治思想においては、国民主義・適中主義、政治制度論、政治アクター論は言うなれば、三位一体の関係となっていたのである。なお、羯南の国民主義と適中主義の具体的検証は、制度構想と共に国民国家が遂行すべき政治政策の構想においてもなされなくてはならないが、その点については他日を期したい⁽⁷⁾。

羯南は、明治20年前後の、内閣制度、憲法制定、議会開設、選挙制度、市町村制・府県制などの諸制度の設置を、国民主義に適う政治制度の整備として、大方、歓迎した。しかし彼は、政治制度の改革だけを以て、国民主義が実現できると考えたわけではない。多元的政治制度の整備が即、それら相互間の有機的連携を持った活動を保証する者ではない。制度改革は、国民主義実現のための必要条件ではあるが、それだけを以て十分条件をも充たす者ではない。羯南は、それに加えて、制度を担い運用する、政治アクター、つまり為政者と国民の双方における精神的・内面的条件の充足が必須となると考えた。彼は、明治憲法の発布を祝賀する一群の論説を書いた後に、「憲法発布後に於ける日本国民の覚悟」という一編を書いて、「神田の祭礼的に

狂歡風喜するのみにて能くすべきに非ざることを忠告せざるべからず」(2-13)と述べた。その点に関して、羯南は、既に憲法制定と帝国議會開幕の以前から、明治維新以後に、特に西洋思潮の導入に伴って朝野に渡って蔓延した功利主義思潮が、国民主義の障害因である旨を表明していた。

「官となく民となく上となく下となく、社会は只々私利を計るの場となり、人類が他の下等〔動物〕と異なる所の道德的の結合力は漸くに消滅して、愛神、愛国、愛他の精神は其の腦中を去るべし。社会の腐敗此処に至りては、国民が敵国外患を防御し、国家の隆盛を計るの元氣は、之を何の処に求めん乎。」(1-561)

羯南の危惧は、初期議會の開会と同時に、政府と民党の双方の行動の中に顕現した。第一～第四議會の、民党と政府の激突、政府の選挙干渉、第五～第六議會の政党（自由党）と政府の野合－彼はこれ等の事態を功利主義風潮の顕現と見た。そこで、彼は、以前にも増して、政治アクターの内面的な思想の陶冶を力説することになった。政治制度を担う官僚勢力、政党勢力、国民など、全ての政治アクターの政治道德の改革方を主張することになった。

羯南が朝野に渉る功利主義思潮の蔓延を批判して、それに替わるべき政治道德として提唱したのは日本伝来の天皇・神道思想であった。彼の天皇・神道觀の特色は、次の諸点に見られた。(1) 羯南は、天皇統治権に消極的態度を採る自由民権思想を批判しつつ、天皇の統治権は、諸々の政治制度並びに諸々の政治アクターの間の対立を解消し、それらの間に調和を生み出す執中権であるとした。そして天皇の執中権は、外面的な政治権力ではなく内面的な精神的権威力である。(2) 天皇の精神的権威力の基礎は神道思想である。羯南は国学神道から学んで、天皇の精神的権威力の根源を皇室の万世一系性なる血統原理によるその神聖性・不可侵性に求めた。(3) しかし、羯南は、平田国学に代表される宗教的神道觀を批判して、神道は日本人の現世の幸福

と福祉を旨とする道德神道である次第を力説した。彼は神道と宗教の峻別を主張したのである。(4) さらに羯南は、国学者や神道家の復古的・排外的な神道観を批判して、神道思想の本旨たる「君民の同慶」、つまり、国民の統一と人民の安寧に適うものは、東洋思想・西洋思想を問わず、広く且つ積極的に受容・摂取して、神道思想の拡充・発展を目指すべき旨を主張した。そこで彼が特に止目したのは、彼と同時代の西洋諸国に於いて、従前の功利主義・個人主義思潮を批判的に摂取・修正しつつ登場した団体主義＝修正功利主義の思潮であった。羯南が神道の道德思想として提示したのは、無欲・無私・無我の境地を求める老荘流の禁欲思想そのものではなかった。もっともそれは、儒教思想、ルソー思想、キリスト教思想などと共に、功利主義思潮の修正作用に寄与する者として重用された。羯南は、過度の功利主義を批判し、適度の社会性を伴った功利主義こそが、神道の道德思想であると考えたのである。(5) 最後に、羯南は、国民主義の立場から、以上の如き天皇・神道思想が、全国民の中に普及・浸透し、全国民によって担われるべきであるとする国民神道の立場を強調した。彼は、国家神道・政府神道を厳しく批判すると共に、国民に対しては国民神道の遵守を厳しく要求した。羯南は、人性論に関して、性善説と性悪説の何れにも荷担しなかった。彼は人欲の問題を深刻に捉えていたが、究極的には、ルソーの自然的善性論や孟子の四端論に見られる様な自由意志説の見地を採って、功利主義思潮を修正する力能を日本人の心中に認め、期待したのである。羯南の同志、三宅雪嶺は中国において典型的な性悪説を唱えた韓非子を引き合いに出して、羯南の道德思想について、次のように言っている。「峭深の文を以て事情を穿ち、是非を明らかにするは韓非に似て、而して爾く慘礫ならず。」(1-70)。

以上の様に、羯南は明治20年代初頭を、「第二維新」の時期と捉え、その根本課題が明治維新の課題を継承する国民主義思想の実現にあると唱えた。そして、そのために多元的な政治制度、並びにそれを担う種々の政治アク

ターに関する構想を開示した。それと併せて彼は、日本の政治アクター、つまり、朝野両領域の日本人の神道・天皇思想＝団体主義思想による政治道徳の陶冶を唱えた。彼は、後者の世界を、「家族的生活」、「社交改良」、「文化」などの観念を以て総括し、前者の世界を、「政治的生活」、「政治改良」、「政治」などの観念で以て総括した。そして、羯南は、これ等二つの世界が連携・協働して働くことによって国民主義思想の内実が実現しうると主張して行ったのである。羯南の国民主義思想は、以上のような政治制度論・政治アクター論と政治道徳論の連携・協働に拠って成立する者であった。彼は多元的政治制度が、政治アクターの道徳的陶冶によって、有機的・調和的に作動することを期待した。多元的なそれぞれの政治制度・政治アクターが、それぞれの独自の機能を遂行しつつ、同時に、有機的に連携して統一国民の意思を作ることを要請したのである。彼は、「立憲政体と謙譲の徳」の合体（参照、2-753）言うなれば、法治の思想と人治の思想の統一が不可欠である旨を説いたのである。従って私は、「結局、彼は、共同体を健全に維持するために、『公益』を優先する公共精神（『徳義』）の維持をひたすら強調し、制度的な措置の講究には消極的であった⁽⁸⁾」という呈の見方には同調する事が出来ない。

羯南は、斯様にして生み出される新しい政治体制を、次のように、平易な形で説いている。

「立憲政体の一特色は百事広く協議に因て行ふといふに在り。・・・簡言すれば専断を少なくして会議を多くすといふに在り。是れ独り立法部に於て然るのみにあらず、行政各部に於ても亦た然り。独り行政各部に於て然るのみにあらず、遂には政治枢機の部にまでも此の会議制を容る々こと、是れ実に立憲内閣の本色にして、・・・夫れ会議制の実行を期せんには、法律上の監督又は徳義上の制裁に充分の威力あるを要す。」(3-722～3)

羯南は、「会議」・「協議」の体系、「和熟せる協議」(3-379)の体系を、政治制度構想と天皇・神道思想の合体によって作り出すべき旨を主張したのである。その境地を羯南は、ドイツ国民主義者の「客観的君主政」という観念に示唆を受けて、「国民的君主政」という観念を以て披瀝した⁽⁹⁾。私は、それを更に羯南の思想文脈に引きつけて、「国民的天皇政」という言葉で表現してみた次第である。

② 国民主義と世界主義—ルソー自然状態論への共鳴と朝鮮国民主義への共感

さて次に、これまで留保して来た問題に言及して、本稿を閉じることにしたい。本稿冒頭の「はじめに」の所で簡潔に指摘しておいた様に、羯南の政治思想には、国民主義とは別のもう一つの基軸、世界主義あるいは人類主義の立場が存在した⁽¹⁰⁾。他でもない国民主義を掲げた羯南が、同時に、それと範疇を異にする世界主義の思想を有していたのである。彼は、国民主義の立場から、「国民と云へる感情は合理の感情なり」(1-65)あるいは、「国民的自負心は決して不正当の感情にあらざるのみ・・・」(1-69)と述べた。しかしながら、後段の引用文に見られるように、世界主義の観点からは、それらが、「偏屈心」、「愚痴」、「地方的感情」、「可賤」等々の、人欲世界の顕現を示す表現で捉えられるに至るのである。ここで、以下の叙述の便宜のために、世界主義の理念型を、丸山眞男の簡略にして核心をついた説明を借りて示しておく。それは、「世界は日本の中にあるのだという観念⁽¹¹⁾」であり、「世界中どこでも同じ人間が住んでいるという感覚、隣の人は日本人である前に人類の一員なんだという感覚⁽¹²⁾」ということになる。つまり、国家の中に生きる国民ではなく、世界に住まう人類こそが至高の価値を持つことを唱える思想である。そして同時に、世界主義の思想は、民族・国家の内

部の全ての部分的集団（階層・階級など）の枠の解消をも含意している。ところで、羯南が斯様な世界主義・人類主義の見地を有した点については、これまで既に、遠山茂樹、小松茂夫、本田逸夫、坂井雄吉、出原政雄らによって指摘・考察されて来た⁽¹³⁾。特に遠山の羯南論は、彼の世界主義思想がアジア論・朝鮮論に影響を及ぼしている次第にも説き及んでいる。私は、これらの先行研究に学びつつ、新たにルソーの自然状態論が羯南の世界主義思想に及ぼした影響をも加味して、考察を、一層、深めてみたいと思う。

政治思想史の上では、世界主義思想の揺籃は、古代ギリシアの植民地政策や異邦人観念を批判して世界市民主義を唱えたディオゲネスあたりに求めることが出来るであろう⁽¹⁴⁾。しかし、世界主義思想の本格的展開の画期は、16世紀西欧の所謂、大航海時代の開幕に求めることが出来る。それ以降、スペイン・オランダ・イギリス・フランス・ドイツ・ロシアなどの西欧諸帝国は、アフリカ大陸、アメリカ大陸、そしてアジア大陸などの諸地域において、植民地争奪戦を展開して行った。斯様な世界近代史の帝国主義の趨勢が、西欧の諸々の地域において、この世界の主潮流に棹差す形で、世界主義思潮を叢生させて行った。ここで、18世紀以降のサン・ピエール、ルソー、カント、マルクス、トルストイなどの面々が想起される。東北アジア地域の事情に注目すると、19世紀中盤の日本開国によって「世界が一つに繋が」（マルクス）り、西勢東漸の趨勢に日本・中国・朝鮮も巻き込まれて行った。そして、これ等の諸国で、福沢諭吉、植木枝盛、中江兆民、内村鑑三、木下尚江そして、清末の変法派の指導者、康有為、末期李朝の開明的官僚、金允植などが西洋世界主義思潮の影響も受けて、世界主義思想を唱えて行った⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾。我が国の場合に関しては、枝盛の『板垣政法論』と兆民の『三酔人経綸問答』が「近代日本の小国主義平和論の源流の中で・・・画期的な産物であった」と指摘されている⁽¹⁷⁾。なお、斯様な歴史的来歴を持つ世界主義思潮が、20世紀において、二つの世界大戦という苦難の媒介を経

て、一般的に、最高の政治価値として広く承認されるに至ったことは周知の通りである。

羯南は19世紀までの、一群の先行思想を受けて、世界主義思想を披瀝して行った。その軌跡を全集本の諸論説の中に辿ってみる。先ず、羯南は、明治22年の論説で、明治10年代後半期の井上条約改正作業を支配した欧化主義の風潮に対する自らの取り組みを回顧して、次のように言っている。

「今を距る二三年前の事なりき。日本国民は欧州文化の風潮に推倒せられて、其の一国民たるの実を失はんとするの勢あり。吾輩は当時其の状態を実観して、如何して日本国民は永く此世に存立するを得るや、国民的感情は今世紀に於て最早容られざるの偏屈心なるやと迄に疑問を胸中に設けて考究したることあり。」(2-78)

ここで羯南は、条約改正作業に際して風靡した欧化主義＝西洋主義の潮流に対抗する自らの立地点を国民主義と世界主義の何れに求めるべきかに関して、思案した次第を吐露している。彼は、「国民的感情は今世紀に於て最早容られざるの偏屈心（傍点は筆者）なるやと迄に疑問を胸中に設けて考究したることあり」と述べている。世界主義の立場からすると、国民主義の立場は単なる「偏屈心」となる。結局、彼は、二つの立場の内、国民主義の見地を選択し、ジャーナリズムの世界に乗り出したのである。しかし、彼は、世界主義の立場を放擲したのではなく、その後も、政治思想の理想・理念としては、堅持していくことになる。

羯南が、最初に纏まった形で国民主義の立場を打ち出した、明治21年の論説、「日本文明進歩の岐路」の中には、次のような文章が差し挟まれている。

「・・・論者（西洋主義論者－筆者）が熱望せる^{インテルナシヨナリチー}宇内主義が四海兄弟の主義に基ける未来の世界（若し之れに達する時ありとせば）に必要なが如く・・・」（1-398）

「固より人類にして既に仁愛の性情を有し、平和共同の目的を有する以上は、何れの日か諸方に割拠せる国民主義混化して宇内一家の境遇に達するの望なきにしも非るべし・・・」（1-399）

また、明治23年、論説、「世界的理想と国民観念」において、世界主義と国民主義の交錯について、次の様に述べている。

「当世の世界は果して^{ヒウマニチー}人類的の個人（傍点は筆者）を本位として進歩の基礎となすか。將た國家的の国民（傍点は筆者）を本位として存立・發育の階梯となすか。・・・ある点に於て世界的理想が漸く發達するは吾輩固より之を認む。然れども又或る点に於て国民的観念が勢力を有するも亦吾輩之を認む。」（2-370）

ここにおいて羯南は、日本「国民」に最高価値を置く国民主義と「人類的の個人」つまり世界的市民に最高価値を置く世界主義の二つの立場の存在を指摘している。「人類的の個人」の立場は、日本民族や日本国民の一員という意識、つまり、日本人という意識を克服して、人類或いは人間という世界規模の普遍的な立場に立つことを意味する。

また、羯南は、同じ23年の論説、「正義を宇内に申べよ」において、世界主義の理想が、現実化している点にも注目している。「正義の力」（2-696）の实在を説いて、日本はその担い手たる、アメリカと提携すべきであるとまで言っている。

「一世を通観するに、能く自から正義を執り且つ之を實際に行ふに足るものは、大国中独り北米合衆国あるのみ。而して其国は幸にして我と相隣り我と相親むの誼あり。我国たるもの

宜しく之と提携し正義を宇内に申べ、宇内万国をして正義の正宗として仰視せしむることを期すべきなり。」(2-696)

羯南は、この論説の中で、「正義は日一日より進み、詐力は年一年より退くを見るなり」(2-696)と述べ、万国赤十字会や万国媾和会などの発展に注目している。

次に、明治24年の羯南の著『近時政論考』における、中江兆民や大井憲太郎たちの「自由論派」に対する高い評価の中にも、世界主義思想が発露していると思う。彼は、近代政治思想史において、「最も著しく個人自由を主張して極度に達し」た者として、「人民各自の相互契約」によって社会・国家の設立を説いたルソーを挙げる。また、「『民約説』の主義は実に個人自由の極度に達したるものなり。」と解説している(参照1-50)。そして、「自由論派」は、ルソーに学んで、「現時の階級を排して平民主義」(1-53)を唱えた。羯南は、「平民論派」と言う言葉に「デモクラシー」というルビを付し(1-52)、「デモクラシク派の理想は人類平等にあり」(1-53)、「自由論派はその論拠を常に義理(理想-筆者)の上に置き、ただ人類を見て種族を見ず」(1-53)と解説している。また、斯様な「自由論派」の思想の方向性について、「理想界に向いて甚だ広し」(1-52)と指摘している。もっとも、「未だ人心を誘掖するに充分ならざりき」(1-51～52)という国民主義の見地からの留保を忘れてはいないのであるが。ともあれ、羯南は本書の中で、「吾輩はこの論派の我が人民の政治思想に大功績ありしを知る」(1-50)と称揚しているのである⁽¹⁸⁾。

そして羯南は、明治26年、『原政及国際論』を刊行し、翌27年に、その増補版として『増補再版・国際論』を出した。彼は、「国際論」においては、帝国主義前夜の国際関係を規定する諸要素の原理的考察を、ノヴィコウの所論を下敷きにして展開した。そこでは、国際政治の現実如何についての

原理的考察が行われた⁽¹⁹⁾。そして、彼は、27年版の末尾に「国際論補遺」を付し、これまでの世界主義思想への言及を受けて、最も纏まった形でその立場を展開している。これは、覚書風・ノート風の叙述ではあるが、「国際論」の単なる付録ではなくて、国際政治の理想論を披瀝しようとする積極的な試みである。羯南は其中で、「四海兄弟主義の顕状」（1-197）と「万国平和思想の事歴」（1-199）について書き、東洋と西洋の二つの領域に於ける世界主義思潮の歴史を概観している。世界主義の源流を、洋の東西の二つの領域に求める姿勢その者の中に、既に、世界主義の構えの反映を見ることが出来る。羯南は、中国に於ける世界主義の由来について、「四海兄弟という語は支那の語なりとせば、支那にも昔しより其の思想ありしや疑なし。」

（1-198）と述べているが、それを主導した思想に関して、「経に曰く、協和万邦、書に曰く、四海之内皆兄弟也」（1-199）と書いている⁽²⁰⁾。次いで、羯南は、西洋における世界主義思潮の来歴を扱う。そこで取り上げられた人物は、ソクラテス、キケロ、グロティウス、クエーカー、サン・ピエール、「ラクロワ⁽²¹⁾」、ルソー、カント等々、多彩である。出原政雄は、これ等の人物群の中で、「ウィリアム・ペンに代表されるクエーカー教徒」と羯南の関係に注目している⁽²²⁾。しかし、私は、彼が最も影響を受けたのは、ルソーであると理解している。

羯南は、「国際論補遺」の中で、彼の世界主義思想の典拠・原点となった者としてルソーの自然状態論に言及して次の様に書いているのである。

「所謂の原人時代に遡らば、君臣なく官民もなし。況んや国家といふものをや。若し自由平等又は個人主義又は四海兄弟主義の能く行はれたるを求めなば、其れ去りて之を原人時代に求めよ。既に国なし、又た君なし、唯だ人（傍点は筆者）あるのみ。個人あるのみ。四海兄弟主義は此の際に在りて最も能く行はるべかりし。

故にジャンジャック氏は、原人時代、彼れの称して『天然状態』を最も道理に適すと言へ

り。其の所謂る社会契約説は此の天然状態を本位とせしもの、社会は唯だ個人等の相互約束に起る、即ち已むを得ずして起るものなり、本意には非るなりと。吾輩は其の説に真理あることを否認せじ。

古代の一切平等の状態は後世に至り平民主義と変名したるが如く、古代の四海兄弟の状態は今日に至りて博愛主義と名を改めたり。」(1-202)

この引用文の考察に入るに先立って、先ず、羯南によるルソーの自然状態論への注目が、此の論説の中で、唐突に現れた者ではないという点を確認しておきたい。その為に、以下、『羯南全集』の中で、ルソーの自然状態論が出てくる個所を、前稿と重なる所もあるが、煩を厭わず引用して見たい。

羯南は、明治10年前後から仏学を修めて来た⁽²³⁾。そして、新聞経営に乗り出す前、太政官文書局に在籍していた明治18年、フランス王政復古期の国民主義者、メーストルによるルソー批判の書、*Étude sur la souveraineté* を、『主権原論』と題して出版した⁽²⁴⁾。羯南の最初のルソー自然状態論への言及は、この翻訳書に於いて見られる。彼は、ルソー自然状態論に対するメーストルの批判を次のように訳出している。なお、相当の意識を試みている個所があることを付記しておきたい。

「難問を解かんと欲して却て為に難問を醸すは、蓋人の奇僻なり。……夫の久しく世の問題たる社会根源論の如き即其の一例なり。看よ、人の胸裡に自然に発生する最単純なる思想をば之を捨て、顧みず、却て実験の為に排斥せらるべき空論を構造せんが為に、無形の談に入るにあらずや。(1-220)⁽²⁵⁾

「凡そ人の性に関せし論は歴史に拠りて説かざるを得ず。故に徒らに人は斯くあるべしと説く所の哲学者の理論は、実に聞くに堪へざるものなり。何ぞや、此れ等の論は必ず実績を後にし、且造化自然の意向に基きて其の説を立つることを為さざればなり。」(1-221)⁽²⁶⁾

メーストルは、ルソーの自然法論や人民主権論を基礎付ける者として自然

状態論を位置づけ、それをルソー批判の冒頭に置いた。そして、ルソーの自然状態論が歴史の現実を無視した人為的な「空論」と「無形の談」に拠っていると批判するのである⁽²⁷⁾。羯南は、メーストルの翻訳作業を通して、少なくとも、ルソーの自然状態論が、ルソー政治思想の原点をなしている旨を知悉したことになる。

羯南がルソーの自然状態論に対して最初に積極的評価を与えた文章は、明治23年の論説、「人材論」の中に見られる。

「昔し歐洲に在り、人唯だ文学技芸の尚ぶべきを知りて道義節操の重きを知らず、举世滔々小技を弄び細芸を衒ひ而して諂諛卑屈、勢に就き利に趨り以て行路の常習と為す。独りルソーなる人あり、敢て当時の風潮に逆らひ、文学技芸の以て風紀を斁り人道を乱ることを痛論し、遂に原人の状態を論拠として『社会契約』の説を唱ふ。其志気の剛大なる百世の下灼として尚ほ光輝あるを覚ふ（傍点は筆者）。」（2-660）

ルソーは、周知の様に、西洋文明の自己批判の書として、『学問芸術論』と『人間不平等起原論』を書き、西洋文明を批判する拠点を自然状態論（＝「自然に返れ」）として展開し、西洋文明の陷穽を克服する方途を『社会契約論』において考察した。羯南は、此の引用文で、自然状態論による、西洋の学術・文明の批判が、「百世の下灼」たる意義を持っていると評価した。

三番目に、羯南は、明治24年の『近時政論考』の中で、中江兆民たちに影響を与えた「ルソー主義と革命主義」に関して、次のように説明している。

「自由平等は人間社会の大原則なり。世に階級あるの理なく、人爵あるの理なく、礼法慣習を守るべきの理なく、世襲権利あるの理なく、従て世襲君主あるの理なし。俗は質樸簡易

を貴ぶ、政は君主共和を尚ぶと。要するに（中江兆民たちの一筆者）新自由論派は夫のルーソーと共に古代の羅馬共和政を慕ふこと、猶ほ漢儒が唐虞三代の道を慕ふが如くなりき。」(1-48)

これは直接的には、「ルーソーの民約論」(1-47)の前提となっている自然状態論について解説した文章である。此の文章の後に、上述の「自由論派」の世界主義的思想に対する高評価の文章が続いているのである。また、羯南は同上書の中で、鳥尾小弥太の思想を解説して、『人間不平等起原論』に言及しつつ次の様に言っている。

「先生既に天地平等万物一体初より高卑物我の分あらざることを以て理論の根本と為す。平等を本として差別を末とすること殆んど夫のルーソーの人間不平等原因論に似たるものあり。」(1-63)

四番目に、明治25年の論説、「社会礼習論」の中で、次のように述べられている。

「激変時代の思想は改革を好むの点に於ては多少の真理を含むや疑なしと雖も、改革に偏するの点に於ては一の狂思想たることを免れず。・・・ジュネーヴの窮措大ルーソーなる人が其の境遇に促されて一狂思想の代表者と為り、『自然状態』を取りて人類生存の真理なりと主張せしは世に隠れなき所にあらずや。・・・夫の狂思想は元と幾分の真理を含むに相違なき（傍点は筆者）も、若し顧慮せず之を敷衍するときは、自ら・・・奇怪なる結果に到着せざるを得ず。・・・老荘の説も亦た然り。」(3-365～366)

ここでは、ルーソーの自然状態論は、国民主義の立場から言うと「狂思想」の部類に属するが、西洋文明の批判という観点から見て、「幾分の真理」を

含有していると指摘されている。そして、老荘の道教思想の中にルソー自然状態論と同類の要素を見出している。

五番目に、上段と同年の論説、「競争の説」の中で、次の様に言われる。

「ルソー曰く、『人其の小智を濫用して天の秘密を揆く。此を以て天の罰を受けて其の自由を失ふ。』吾輩は此の説を見て頗る奇矯に失するものと做し、彼れ世の學術技芸の弊を非毀する、其の極終に社会の文明を無視するに至れることを笑ひたり。然りと雖ども、吾輩は今まにして而後に一真理の其の説に寓することあるを見る（傍点は筆者）。小智曲学の社会を害する亦た甚いかな。」(3-399)

ここでは、キリスト教の墮罪思想を援用して、ルソーの自然状態論が、「一真理」を含有している次第が、述べられている。

六番目に、明治26年に刊行された『原政及国際論』の中では、上の引用文と同じ主旨の見地が、次のように書かれている。

「ルソーといへる人の言に『人は濫りに天帝が張り置ける帳を開きて秘密を窺はんと欲す。其の罪に因りて自由を剥奪せられぬ』とあり。奇言の中にも自ら真理の存する無きにあらず（傍点は筆者）。・・・彼等（進歩主義者－筆者）は常に人類を動物の方面より観察して、物質的法則をこの世界に応用せんことを務む。ルソーの所謂の窺秘の罪は此の辺に出づ。而して罪は立ころに至る。」(1-132～133)

以上の六箇所の引用文によって、羯南が、新聞経営によって世に出る以前の役人時代から、ルソーの自然状態論を知悉し、そして、それ以降もそれに対して極めて強い関心を持ち続けた次第が明らかである。

ここで、『国際論補遺』の上引きの引用文に立ち返ることにする。羯南はこのルソー論の出展を明示していないが、それが、前述の『学問芸術論』と

『人間不平等起原論』で展開された所論であることは明らかである。周知の様に、両著においてルソーは、ホッブズの自然状態論を批判して、ホッブズの「万人の万人に対する闘争」という格言に表れている人性・人欲観は、文明状態における人間の心性の有様を描いたものであり、真の自然状態における人間を捉えたものではないと批判した。「自然に返れ」という格言は、誰よりも、先ず、ホッブズ的思想に対して投げかけられた。羯南の上引きの引用文における「原人時代」という言葉は、ルソーの自然状態を意味する。そして、羯南は、ルソーが解析した自然状態論に依拠しつつ、自然人の心性や態度の中に世界主義思想の存在根拠を求めた。羯南は、上の引用文の中で、自然状態の有様を次の様に描いた。「既に国なし、又た君なし、唯だ人あるのみ。個人あるのみ。四海兄弟主義は此の際に在りて最も能く行はるべかりし。」ルソーが考案した自然状態に於いては、所有、不平等、民族、国家など、地球上の人間を隔てる一切の障壁が存在せず、地上の万人は、生命保持に不可欠な「真の必要 un véritable besoin⁽²⁸⁾」(=「自己愛」と「憐憫」)だけの充足を求めて生きる。そこでは全世界の人類は、斯様な共通の普遍的感情によって生活し、人欲の奔流に起因する「万人の万人に対する闘争」といった状態は存在しない。そして、国家を初めとする部分団体の枠に拘束されない、上段の引用文にある「人類的の個人」(2-370)なる者が展開するのである。羯南は、世界主義思想を担保するルソーの自然状態論に関して、「吾輩はその説に真理あることを否認せじ」と断じているのである。先述の様に、羯南は、国民主義論という文明時代の現実を前提とした立論では、ルソーの自然状態論を「狂思想」として批判したが、当為の領域たる世界主義思想の根拠如何という問題局面においては、ルソーの自然状態論に高い評価を与えることになった^{(29) (30)}。また、彼が、上の引用文において、ルソーと共に「狂思想」の持ち主と考えた中国の老子を、世界主義思想の原点とし

て、ここに付加することが可能である。さらに、羯南の時代には、ルソーと同様の意味において、人類史の「自然世」から「法世」への転換を批判的に描出した徳川時代の思想家、安藤昌益は未だ、世に知られていなかった。彼がもし、安藤昌益を知っていたならば、世界主義思想の日本に於ける原点をも指摘する事が出来たはずである⁽³¹⁾。斯様にして羯南は、ルソーや老子の自然状態論に依拠する世界主義の思想が文明社会の歴史を前提とする国民主義の思想と異質の政治原理である旨を、次のように喝破している⁽³²⁾。

「博愛主義（世界主義－筆者）は人間に基き、愛国主義（国民主義－筆者）は国民に基く。若し夫れ博愛主義に基きて人間の統一を計るの日に至らば、今の所謂愛国心なるものは尚ほ地方的感情の如く、却りて人間の統一に害ある可賤の感情（傍点は筆者）とならん。」（4500）

此の引用文には、国民主義と世界主義の区別だけでなく、同時に、羯南の政治思想の体系において、世界主義が国民主義の上位に位置する至上の価値原理として位置づけられている次第が改めて明示されている。羯南は、同じ趣旨を次の様にも説いている。「排他自衛の思想（国民主義－筆者）は絶対に善しと言ふこと能はじ。否な絶対に善しと思ふ者は今日の社会其れ幾人かあるや。要するに其の程度如何と顧るのみ。」（1-197）

羯南は、斯様に、世界主義の思想を、政治思想における至上の価値原理として称揚した。しかし、『日本』紙上で展開された実際の言論活動は、世界主義の観点を主軸とするものではなく、現実の日本内外の歴史状況と政治状況を踏まえた国民主義に立脚したものであった。既に上段において、再三、引用済みの所であるが、彼はルソーや老荘の自然状態論を、国民主義の立場から次のように批判していた。

「激変時代の思想は改革を好むの点に於ては多少の真理を含むや疑なしと雖も、改革に偏するの点に於ては一の狂思想たることを免れず。・・・ジュネーヴの窮措大ルソーなる人が其の境遇に促されて一狂思想の代表者と為り、『自然状態』を取りて人類生存の真理なりと主張せしは世に隠れなき所にあらずや。・・・其の狂思想は元と幾分の真理を含むに相違なきも、若し顧慮せず之を敷衍するときは、自ら・・・奇怪なる結果に到着せざるを得ず（傍点は筆者）。・・・老荘の説も亦た然り。」(3-365～366)

羯南は、国民主義の立場からは、文明社会を糾弾するルソーや老子の自然状態の思想を採ることは出来なかった。それは、文明の衰退と崩壊を帰結する「狂思想」と理解されたのである。彼は、「身を人類社会に置き人道を主として評下すれば、是れ人為のみ。決して所謂天則にはあらざるを知るべし。」(1-143)と述べている。彼はルソー・老子的な「人類社会」と「人道」の思想は、歴史的現実を切断・超越して「推理」の力で設定された「人為」の産物であり、それは、歴史的現実に於ける必然の世界たる「天則」(＝「優勝劣敗の天則」, 参照, 1-171, 3-589)の成り行きを無視する者であると断じているのである。それは、ユートピアの世界に属するものと言うわけである。この見地は、上記のメーストルの著『主権論』の引用文の立場でもあった。羯南は、世界主義の観点からメーストルが批判したルソー自然状態論を評価したのであるが、他方、国民主義の観点からはルソー自然状態論を批判したメーストルの見地を採ったのである⁽³³⁾。

斯様にして羯南は、論説、「世界的理想と国民主義」を書き、その中で実際の政論活動においては、世界主義ではなく、国民主義の立場に立つことを宣言した。

「其国中に就て之を求めば、個人を本位とせる旨義を抱持するもの決して少なきにあらざるべし。然れども其が暫く個人の資格を離れて国民なる共同体の資格よりすれば、多くは自

負的国民の本色を顕さざるものなし。我国に於て独逸風の軍制を採用すれば、何故に仏人の感触を悪くするか。我が国に於て露国と親密を先にすれば何故に英人の不快を生じるか。是れ尤も察せざるべからず。吾輩は此に於て今日の邦国は其本位『個人』の上に在らずして『国民』の上に在ることを知る。」(2-371)

「世界的又は個人的理想を以て之を觀察せば、国民的自負心は一の愚痴なるかも知るべからず。然れども如何せん今日の人間社会は之を以て生存競争の基礎となすことを。」(2-372)

かくして羯南は、言論活動の拠点として、現実世界の趨勢の認識を基に、「個人」つまり人類の立場に立脚する世界主義ではなく、「国民」の立場に立つ国民主義を敢えて選択した。彼は、日本はアメリカ流の「博愛主義」の立場は取れないと述べ(2-373)、「国家は人類最高の団体」(1-142・143)と喝破するに至った。そして、羯南は、論説、「再興自由党」という論説の中で、中江兆民や植木枝盛などの世界主義思想に対して、国民主義の観点からは、次のように論ずるのである。「諸子は個人主義を主張すべし。宇内的（傍点は筆者）自由を唱導すべし。然れども吾輩は諸子に一言す、日本国民の自由権は、今日如何なる地に在ることを思考せんことを。」(2-389) 羯南は斯様にして、国民主義の立場を選択して、此の立場に立って、一群の新聞論説を執筆して行った。しかし、彼はその後も一貫して、世界主義の立場が至高の政治原理であるとする姿勢は堅持した。斯様な次第が、羯南の国民主義が暴走に陥る事態に歯止めをかけたと考える。ここでそのケース・スタディの一つとして、明治期を通して、不平等条約の改正と並ぶ重要な外交課題であった朝鮮問題に関する羯南の論説を取り上げて見たい。

羯南は新聞『東京電報』の発刊時から、朝鮮を取り巻く国際環境の動向に強い関心を寄せていた⁽³⁴⁾。彼は、朝鮮問題を帝国主義開幕期の世界情勢の中に位置づけ、イギリス・ロシア・フランス・ドイツ、清国などの朝鮮戦略との関りで観察した。そして彼は、「東洋問題の中心点は目下重にも韓京に在り」(3-254)と考え、朝鮮半島は「東洋のバルカン半島」(1-621, 2-378,

2-655) であると喝破した。19 世紀に入って、オスマン帝国衰退期のバルカン半島は、オスマン帝国の支配地域を巡るイギリス、フランス、ロシア等の欧州諸列強の利害・野心が錯綜する火薬庫の様相を呈していた⁽³⁵⁾。そして、朝鮮半島も、上記の諸列強の思惑が交錯・衝突し、末期李朝、特に、明治 9 年の日朝修好条規締結以降、その渦中に投げ込まれていた。斯様な意味において、当時の朝鮮論は、日本人の掲げる世界主義と国民主義の性格如何を占う恰好の試金石となっていたのである。

羯南は、新聞刊行に乗り出した明治 21 年から日清戦争に至る時期、「国家の安危」と「国権の伸縮」(2-423) を基準とする日本国民主義の立場から、一群の朝鮮論を発表して行った。彼は、21 年、「露韓の関係は対岸の火災にあらず」と「高麗半島の現状」の二編の朝鮮論を発表した。何れの論説にも、甲申政変以降の清国とロシアの朝鮮に対する介入強化、特に、朝露密約事件が大きな影響を与えた次第が窺える。彼は前者の論説で、清国・朝鮮への自紙の関心が、欧米関心に比べて希薄であった点を反省し、「朝鮮は数年前より実に清露の競争場と為れり」(1-536) と注意を喚起している。そして、二番目の論説では、清国或いは露国による朝鮮支配が日本に及ぼす脅威を懸念し、日本の積極的な朝鮮進出の必要性を説いている。清国は、甲申政変以降、袁世凱を朝鮮に送り込み、旧来の朝貢体制の枠を超えて、「朝鮮内外の政事に干渉」(1-620) するに至った。また露国も、所謂、南下政策を強化して「高麗半島を占領して東洋の大権を制せんと志」(1-620) を露骨に示している。「吾輩は日常自国の富力と武力とを賭して、他国の事に干渉するを欲する者に非ずと雖も、自国の利益を維持するが為めには、時有りてか之を取らざる可からずと断信する者なり。」(1-621) 羯南は、清国・露国に対抗して、武力的な朝鮮介入をも主張し、明治政府の消極性や弱腰を批判している。以上の如き 21 年の二つの論説は、日清戦争に至るまでの一群の朝鮮論の基調となった。羯南による朝鮮物の執筆の頻度は、防穀令問題を

初めとする日朝の経済摩擦が顕在化する 22 年以降、急速に増加した。其処では、この事件の背後に「他の大国の勸諭」（4-118）が潜んでいると考え、「……我国の朝鮮に対する、自から先導者たり保護者たるの位地に立ち、誘掖提撕勉めて之と関係を厚くし、其れをして独立の基礎を鞏固ならしめ、永く此半島を失はず、以て我西方の牆壁たらしむることを怠る可からず」（2-378）と主張した。明治 27 年の日清戦争の時期になると、それまでの明治政府と民党陣営の対立、明治政府並びに民党陣営の両者に於ける内部対立が収束して、正に、挙国一致の政治的・思想的な戦争推進体制が生まれた⁽³⁶⁾。そして、羯南も此の戦線に加わって行った。明治政府の朝鮮出兵と開戦布告の決定に際しては、論説、「朝鮮事件と総選挙」を発表し、「万一朝鮮折れて清属に入らば、日本海の南門は其の半扉を失はん」（4-526）と書き、政府の対応に関して「……夫れ朝鮮事件に対する政府の措置は、其の生平の慣習に似ずして頗る活発の状あり」（4-527）と賞賛を惜しまなかった。また、論説、「対外硬派の進運」においても、「彼等（明治政府の－筆者）の対外政略は甚だ不調子なれども、事既に強硬に傾きたるは吾輩の頗る喜ぶ所なり」（4-541）と政府の朝鮮政策への支持を表明している⁽³⁷⁾。

以上の如く羯南は、明治 20 年代初頭の時期から、日本国民主義の立場に拠って、西洋列強や清国の朝鮮介入に対抗して、明治政府が積極的な朝鮮政策を採ることを要求し、1894 年の日清戦争に際しては、明治政府の朝鮮出兵と日清開戦を積極的に支持した。しかし同時に彼は、日清戦争の直接的原因となった東学党の蜂起に対して、独自の論評を試みている。東学党は 1893 年、報恩郡で大規模集会を開催し世の注目を浴びた。羯南は、同年の論説、「三危邦」では、東学党の動きに対して、「東学党の暴動」「暴徒の勢力」という否定的言葉を吐いている（参照、4-137）。翌 27 年、東学党を中心とする農民軍は、全蹕準の指導下に古阜郡で蜂起し、政府軍を窮地に追い込んだ。それを契機に、羯南の東学党理解が深まり、同年 6 月以降、論

説,「朝鮮事変(東学党の乱)の大勢」,「東学党の志を悲しむ」,「内乱に係る国際法」などを書いて,東学党の思想や蜂起に対して共感の意を示すに至る⁽³⁸⁾。

最初の論説では,李朝官憲と東学党の対立の認識を踏まえて,後者が帯びている朝鮮国民主義への共感が表れる。羯南は,東学党が,「該道(全羅忠清二道-筆者)久しく収斂の苛に耐えずして民心早く政府を離れ」といった呈の李朝官憲の虐政に抗して興ったものと観察し,その性格について,「尋常の盜賊に非ず」と述べ,彼等は,「閔氏を亡さんとする・・・革命党」であると断じている(参照,4-525)。

二番目の論説では,羯南は,李朝政権を批判すると共に,東学党や金玉均・朴泳孝たちの開化派を朝鮮の国民主義勢力と捉え,彼らに対する共感の意を次の様に表明した。

「社会の衰亡は先ず官吏貴人の腐敗に源すること,天下の通則なり。況んや,憲法の以て之を制するなく議会の以て之を監するなく,其の暴横専恣に放置して而して歳月を徒費するものに於てをや。社会は衰亡に赴かずして何をか俟たん。朝鮮社会の如き吾輩は久しく其の衰亡に瀕するを思ひ,夫の十年に於ける金朴二氏の挙に深く同情を表す。」(4-534)

羯南は先ず,李朝末期の「官吏貴人」による「暴横専恣」,つまり閔氏一族の所謂,勢道政治を厳しく糾弾し,1884年,李朝政治体制の変革を唱えて甲申政変を起こした所謂,急進開化派の金玉均や朴泳孝の活動を称揚し,彼等に対して共感を示している。続いて,東学党の蜂起に関説して,それが金朴両者の活動を継承するものとして,次のように書いている。

「今や東学党は又た(傍点は筆者)義を南方に唱えて興れり。彼れ豈果して社会の為に興る

か、吾輩は寧ろ其の健全を祈るのみ。何となれば、是れ朝鮮社会の一救世軍なればなり。是れ朝鮮社会の腐敗を医せんとする仁術なればなり。・・・彼等は少なくとも無道に窘められて已むを得ずに無道を働くものなり。是れ良民の常なり。深く咎むるには足らず。否な寧ろ悲しむべし。若し彼等をして、其の君主が姦臣に壅蔽せられ、其の権臣等が曾て君国を思ふの心なく唯だ一日の安と一夕の楽とを貪りて或は清に依り或は日に頼り又或は露に屈し（傍点は筆者）、其の国が日に月に衰亡に就きて救はれず、との現状を解せしめば、其の気焰は一層の騰揚を得べきなり。而して吾輩の彼れに表する同情は一層深かるべし。・・・今ま朝鮮東学党の事変を聞き其の志を悲むと同時に、又た本邦に於て閥族専横を憤り外権内侵を憤る者の甚だ順良なるを感ず。」(4534)

羯南は、東学党の面々が、李朝政府の「姦臣」・「権臣」による横暴な苛政に耐えかねて、已むおえず武力に訴えて反抗に及んでいる次第を「朝鮮社会の腐敗を医せんとする仁術」と捉え、彼らを「朝鮮社会の一救世軍」であると称揚している。また、三番目の論説、「内乱に係る国際法」では、東学党を、「道理あるの反抗者」あるいは「乱賊視することは非なり」と述べている(4535)。他方、李朝政府が、東学党の反政府運動を弾圧するために、清国、日本、露国などの他国の力に依存しようとしている点を厳しく糾弾している。羯南は、東学党の挙兵と其の思想の中に、朝鮮国民主義の躍動を読み取り、それに対する支持を表明し、他国に依存して、その弾圧を図る李朝政権を批判しているわけである。これは、羯南が、上記の開化論者や東学党を朝鮮人民の国民勢力と看做し、朝鮮国民主義の担い手として捉えていることを示している。「本邦（朝鮮－筆者）に於て閥族専横を憤り外権内侵を憤る者の甚だ順良なるを感ず。」只、羯南は、東学党が朝鮮国民主義の実現を推進していくためには、立憲主義の見地に立つべき旨を進言している。「若し彼等をして世に立憲政治なる者の其の能く平穩に政府を改良し得べきを知らしめば、猶ほ一層の同情を世界各国人より受くべきなり。」(4534⁽³⁹⁾)

さらに羯南は、前述の論説、「高麗半島の現状」において、甲申政変に際

して、金玉均や朴泳孝たちとは異なる立場を採った所謂、穩健開化派の金宏集について「朝鮮に於ける開進党の領袖にして、同国の士人中鏘々の人物」(1-621)と述べている。羯南は、急進開化派、穩健開化派、東学党など、李朝奸官勢力に批判的態度を採った面々を、広く、朝鮮国民主義の担い手として評価し、彼らに対して共感を示しているのである。なお、金宏集を始めとする穩健開化派が末期李朝政治史の主役として活動したのは、壬午軍乱から甲午改革にかけての10年余りである。この時期、金宏集と行動を共にした金允植と魚允中の二人の李朝官僚を、私の判断でここに加えることを羯南も認めるであろう^{(40) (41)}。

なお、羯南は、明治40年に没しているから、日清戦争の後、10年余り、論説活動を続けた。本稿は、この時期を考察対象としていないが、明治国家が帝国国家への傾斜を強めるこの時期は、羯南の世界主義思想の帰結を見る上で重要な意味を持つ。その点に関して、一群の研究文献が出されているが、その結論は、大づかみに総括してみると、日清戦争以降、朝野の両領域で顕著となった帝国主義的思潮と朝鮮領有策に同調するに至ったと見ている⁽⁴²⁾。私も、この様な見方が、正鵠を失しているとは思わない。例えば羯南は、1904（明治37）年、日露戦争の渦中で締結された「日韓議定書」に関して、論説、「韓半島と日本（日韓議定書に付て）」を執筆し、日本国民主義の立場から次のように述べた。

「韓半島の地域は日本帝国自衛の為に離る可ざるなり。若し第三国にして此の地域を侵害せんか、帝国の苦痛は其の半身を侵害せらるゝに均しからん。今回の日韓議定書はこの関係より生ずる自然の結果、世界列国の視て怪まざるべき所たり。」(8-268)

羯南は、「日韓議定書」が、世界情勢が生み出した「自然の結果」であると、国民主義の論理に立ってそれを容認した。

しかし、それを以て、羯南が政治理想論の局面においても、世界主義の見地を放棄して、排外的な日本膨張主義に帰依したと見ることは出来ない。彼は、朝鮮の朝野の両分野において、所謂、「義兵闘争」が起こった際、論説、「京城の近信（対韓策は巧を要せず）」を書き、「然れども、朝鮮の君臣をして斯くまで我に反抗せしむるに於ては、我が外交当局に何等かの過失ありといふも可なり」（8-437）と戒めの文章を差し挟んでいる。更に羯南は、三次に及ぶ「日韓協約」の締結に抗して、李朝高官が相次いで自決をした事態に対して、論説、「韓国人の慷慨」を書いて、次のように述べているのである。

「韓国との新約は該国の人心に少からぬ刺衝を与へしと見え、・・・元老趙秉世侍従武官閔泳煥の自殺せるあり、韓人慷慨の状、以て察するに足る。我が日本の立場よりせば、・・・時事を解せざるの行為とする外なけれど、自国の事情に照らせば（傍点は筆者）、幾分か同情の寄すべきを覚ゆ。」（9-265）

此の文章には、日本国民主義の論理と世界主義の論理が重なり交錯する形で表れている。羯南は晩年、朝野の両領域に帝国主義的風潮が一段と深まった日露戦争期においても、なお、「人為」の世界たる理想郷の政治原理、世界主義思想そのものを放棄することは無かった。彼は、排外的国家主義そのものを国是、至上の価値原理として掲げることは終になかったのである。ちなみに、羯南は、日清戦争以降、朝鮮と同じく日本と対立関係にあった清国やロシアの国民主義運動に対しても共感の意を示している⁽⁴³⁾。

それでは羯南は、いかなる理由によって、朝鮮の東学党、変法党、義兵闘争、そして、清国・ロシアの革命運動など、日本と係争関係にあった諸国の国民主義運動に対して共感・理解を示すことが出来たのか。先ず指摘できるのは、これまで言及して来たところであるが、彼が、ルソーや老子の自然状

慈論（＝文明批判論）から学び取った世界主義の見地を、至高の価値原理として堅持していたということである。彼は、国家、国民、民族、階級・階層など、地球上の人間を分け隔てる一切の障壁を克服した、「人類的の個人」の立場こそが、至高の価値原理である旨を弁えていた。しかし、斯様な世界主義の思想が、即座に且つ直接に、朝鮮・中国・ロシアの国民主義運動に対する共感・理解を生み出したわけではないと思う。確かに、世界主義思想はそのための、絶対的な必要条件ではあるが、只それだけを以て、十分条件をも充たしているというわけではないと思う。羯南は、政治理念として世界主義を掲げると共に、現実の国際情勢を踏まえて、ドイツ国民主義者のブルンチュリーなどに学んで、それと範疇を異にする国民主義の思想を唱えた。「人類的の個人」とは異なる「日本的の国民」の見地を主張したのである。当然、羯南は、この二つの立場は「矛盾」（1-196）する者である旨を自覚していた。そして、彼は両者の相克に関する考究の結果、自分の政論活動の思想根柢としては、世界主義ではなく、国民主義の立場を選択した。かくして、本稿で考察した彼の制度構想と政治思想は、国民主義の立場で書かれて行ったのである。彼は、実際の政論活動においては、国民主義の立場を主軸とし、世界主義の立場を主軸とすることは、終になかった。しかし、私は、羯南の政治思想に内包されていた斯様な二重性（矛盾性）こそが、朝鮮国民主義に対する一定の理解と共感を生み出した要因であったと考える。確かに彼は、実際の政論では国民主義の論理によって、日清戦争期に、日本の朝鮮出兵や開戦宣言を支持し、日露戦争期には、「日韓議定書」や「日韓協約」の締結を支持した。さらに、日清戦争に於ける実際上の局面で、朝鮮国民主義と日本国民主義が衝突した場合、彼は後者を選択した。例えば、東学党の行動スローガンであった「斥倭（傍点は筆者）斥洋」に対する評価は消極的であり（参照、4525）、東学党が、日本軍を攻撃する段になると、論説、「政治家の恥辱（対韓策の当事者に告ぐ）」（27年12月）を書いて、それを

批判した⁽⁴⁴⁾。彼はその際、必ずしも、両国の国民主義の均衡を考慮するという作業を十分に行っている様には見えないのである。しかし、同時に、日本国民主義を自覚的に提起していたことが、世界主義の理想原理に媒介されて、先述の如き、開化派や東学党などの朝鮮国民主義に対する理解・共感を生み出した点も看過すべきではない。羯南は世界主義と国民主義の矛盾・交錯を熟知しており、而も二つの内で世界主義がより進んだものであることを弁えていた。彼は自らも含めた日本人が意識下の奥底に秘めている日本国民主義の感情を表に取り出して、自覚的にその考究を深めた。そして、国民主義を、「愛国心は合理の感情である」と考えて、自らの政論活動の価値基準としつつも、同時に他方では、世界主義の立場から、それを相対化して、「偏屈心」、「愚痴」、「地方的感情」、「可賤の感情」と呼んだ。そして、西欧諸国の歴史的経験から、「自衛的国民主義」が、「侵略的国民主義」へと展開する危険性も熟知していた。（参照、2・704・705・706）。羯南は世界主義と国民主義との相克に関して、深い洞察を加えたが故に、国民主義を金科玉条のものとはしなかった。そうであるが故に、世界主義による日本国民主義の抑制の論理が働いて来る。遠山茂樹の表現を借りると、世界主義による「朝鮮侵略政策への同調にたいするブレーキ⁽⁴⁵⁾」が働いた。また、柄谷行人の言い種を借りると、彼が、カントに拠って提起した「理性の統整的使用」の余地が生じたのである⁽⁴⁶⁾。日本人の無意識の心中に奥深く沈殿していた日本国民主義を自覚的・意識的に前面に取り出して、考究を進め深めていたことが、世界主義による「統整」作用を媒介として、朝鮮国民主義に対する共感・理解を可能にさせたのである。朝鮮国民主義に対する共感は、勿論、日本国民主義だけでは生じなかったし、また、世界主義だけでも生じなかったと思う。それは、世界主義を潜った国民主義、そして国民主義を潜った世界主義によって、つまり、両者の合作によって生まれた者であったと思う。羯南の世界主義思想は、日本国民主義思想との取り組みを踏まえていたが故

に、後者の閉鎖性と独善性を抑制する役割を果たしたのである。総論・一般論の局面で、世界主義を唱えても、各論・具体論の局面において、必ずしも、朝鮮や中国の国民主義に理解を示すことが出来なかった明治人は少なからず存在した⁽⁴⁷⁾。羯南が斯様な陥穽を、不十分な面があったとは言え、免れ得た所以が此処にあると思う。世界主義思想が何らかの効力を持つためには、逆説的ではあるが、その前に横たわる日本国民主義思想の関門・鬼門を潜らなければならなかったと思われる。

羯南は、若い時分から晩年に至るまで漢詩に親しみ、一群の作品を残している。最晩年の明治39年には、「病中口占」という一首を詠み、その中で約20年間の言論活動を顧みて、次の様に書いている。「平生自分は事の機微を早く見抜く才能があると自負していた。それをよいことに、病臥の今も俗塵を払って隠土の生活に入ることが出来ずにいる。⁽⁴⁸⁾」。羯南は、その一年後に、鎌倉極楽寺の居宅で生涯を終えた。本稿は、羯南における日清戦争の時期までの国民主義思想の実相を、明治維新时期以降の政治思潮との関わりにも留意して、出来るだけ多面的且つ総合的に考察することを試みた。拙稿が、これまでの多くの先行研究に加えて、羯南が漢詩の中で吐露した自分の持ち味についての自負の念が、決して的を失った者ではないこと、引いては、彼の国民主義思想の中に、思考法上の曖昧さと無主義を指弾する彼と同時代人の見方、そして、昭和前期の超国家主義の先駆・源流を読み取ろうとする昭和後期以後の研究者の中にある見方が必ずしも、的を得た者でないことを証明するために、改めて、何らかの寄与を成し得ているとすれば幸いである。

（注）

- （1）岡 義武は、昭和 21 年に発表した論説、「明治維新と世界情勢」において、明治維新の性格について、「国家的変革によって世界政治における自民族の存立自体を防衛し確立せんとしたところにその最大の意義をもった実に深刻なる民族革命であったのである」と述べ、その後の明治維新民族革命説の原型を打ち出した。参照、『岡 義武著作集・第一巻』岩波書店、1992 年、284 頁。なお、この論説に関する、関口榮一と坂井雄吉の「解説」が、前掲書 307-309 頁と『著作集・第六巻』314-319 頁に付されている。羯南の明治維新論の中に、岡 義武によって提起された「民族革命」説の一つの先駆的形態を見ることが可能であると考えられる。
- （2）「第二維新」という言葉は、羯南と同様に、明治政府と自由民権陣営の双方の立場を乗り越えんとする構えを取った面々によって提起されている。以下にその事例を列挙してみる。「王政の第二維新」（『福沢諭吉全集・第 12 巻』岩波書店、1960 年、83 頁）、「第二の維新」（西田 毅編『竹越三又集（民友社思想文学叢書・第 4 巻）』三一書房、1985 年、261・310 頁。）、「第二の維新」（『鼎軒田口卯吉全集・第 5 巻』吉川弘文館、1990 年復刊、292 頁・293 頁）、「第二之維新」（宮崎湖處子『民友社文学集（明治文学全集 36）・人見一太郎』筑摩書房、1970 年、148 頁。）。
- （3）羯南は、同様の意味において、「推理法」と「酌例法」（1-637）、「抽象的の説」と「現実的の議」（2-74）、「理想主義」と「現実主義」（2-190、1-24）また、「理論に因りて事実を支配するもの」と「事実に基づきて理論を施行するもの」（3-611）等々の両極の思考法に拘泥することを排して、現実の事情を勘案しつつ、両極の相関如何について考慮すべき旨を説いている。ここにも、彼が明治維新と第二維新の思考法上の区別に拘った次第が表れている。
- （4）「日本人」刊行会編『日本人・第 3 巻』日本図書センター、1983 年所収。
- （5）三宅雪嶺「明治思想小史」鹿野政直編『日本の名著 37（陸 羯南・三宅雪嶺）』中央公論社、1971 年、426 頁。
- （6）羯南は、同様の主旨を次のように書いている。「文明政道の要素たる統一旨義及び博愛旨義は今日に至る迄著しく日本に発達したりと雖も、独り各人能力の啓発に係る要素は前二者と並行する程の発達に至らず。統一せられたる国家の下に各人の権利は甚はだ薄弱に認識せられたり。日本の未だ立憲政体たるを得ざるは則ち此を以ての故にあらずや。」（1-19）彼がここで言う「文明政道」とは、先述の 19 世紀に興隆した西欧国民主義思想を指している。

- (7) 羯南は、『行政時言』において、政治政策の分野として、「国威」・「国安」・「国財」・「国俗」・「国富」の五分野を挙げている（参照、1-100）。そして、彼は此等のそれぞれに対応する外交政策、治安政策、財政政策、教育政策、経済政策などの諸政策について、全集本に収録された諸論説の中で、分析・検討を行うと共に対案の提示を行っている。
- (8) 朴 羊信『陸羯南－政治認識と対外論－』岩波書店、2008年、35頁。また、かつて坂井雄吉も羯南の国民主義思想の中に、「制度的、機構的思惟の弱さ、実質目的の優位という問題が」存在すると指摘した。参照、坂井雄吉「明治憲法と伝統的国家観－立憲主義の国体論をめぐる－」石井紫郎編『日本近代法史講義』青林書院新社、1972年、93頁。
- (9) 羯南が「国民的君主政」という言葉を発する上で、ドイツ国民主義者、シュルツェの「機関的国家」と言う観念も与っていると考えられる。彼は、シュルツェに拠って次のように言っている。「国法上より・・・論ずれば、専制政体と立憲政体との大なる区別は、国家の組織の機関オルガニスムのなると、器械マシーニスム的なとに在り。蓋し専制政体に在りては、国家の各機関は常に器械的の働きをなし、毫も独立の意思を有せず、百事国家元首の直接の干渉を受けて、職務を行ふと雖も、立憲政体の機関は然らず、必ずや其職権に就ては独立の意思を有し、国家の元首と雖も、恣まに之れに干渉すべからず。」(1-520) また羯南は同様の主旨で、シュルツェに拠ってモンテスキュー流の自由主義的・個人主義的権力分立論を批判している。「・・・国家に器械的あり又た機関的あり。主権の下に三権力分立して相ひ調和するものは機関的組成なれども、三権力鼎立し互に侵圧して主権たらんと欲するものは器械的組成なり。日本の立憲政体に於ける権力組成は所謂の機関的国家にして最も進歩せるものとす。」(1-26) シュルツェと羯南の関係については、次の文献を参照。山田央子「陸 羯南における政党観の特質－初期議会前後を中心に－」『明治政党論史』創文社、1999年、176-180頁。坂井雄吉「『国民論派』の使命 (3)－陸 羯南の初期政論をめぐる－」『大東法学』第16巻第1号、2006年、172-180頁。シュルツェに関する専論としては、次の文献がある。栗城壽夫「ヘルマン・シュルツェの憲法理論」梧陰文庫研究会編『明治国家形成と井上 毅』木鐸社、1992年所収。なお、「器械的国家」と「有機的国家」の観念と両者の区分は、すでに早く、ドイツ国民主義の祖の一人、ヘーゲルの著作に見ることが出来る。Vergl., G. W. F. Hegel, Grundlinien der Philosophie des Rechts, Philosophische Bibliothek 124a, herausgegeben von J. Hoffmeister, Hamburg, 1955, SS. 251-252, 上妻 精・佐藤康邦・山田忠彰訳『法の哲学－自然法と国家学要綱－（下巻）：ヘーゲル全集9b』岩波書店、2001年、494-495頁。

- (10) 参照、拙稿「陸 羯南における国民主義の制度構想（1）」『福岡大学法学論叢』第48巻第3・4号、2004年、395頁。
- (11) 丸山眞男「普遍の意識欠く日本の思想」『丸山眞男集・第16巻』岩波書店、1996年、56頁。
- (12) 丸山眞男「好さんについての談話」『丸山眞男集・第9巻』岩波書店、1996年、338頁。
- (13) 遠山茂樹「陸 羯南の外政論－とくに日清戦争前後の時期を中心として－」『遠山茂樹著作集・第4巻』岩波書店、1992年、147-164頁、（初出は、『横浜市立大学論叢・人文科学系列』第24巻第2・3合併号、1973年）。小松茂夫「陸羯南－『国民』国家における『新聞記者』の使命」小松茂夫・田中浩編『日本の国家思想（上）』青木書店、1980年、236-237頁、262-263頁。本田逸夫『国民・自由・憲政－陸羯南の政治思想』木鐸社、1994年、191-198頁。坂井雄吉「『国民論派』の使命（1）－陸羯南の初期政論をめぐって－」『大東法学』第15巻第1号、2005年、90-96頁。本田逸夫「明治中期の『国際政治学』－陸 羯南『国際論』と Novicow J., La politique internationale をめぐって－」『法学（東北大学）』第59巻第6号、1996年、925-927頁。出原政雄「近代日本における西洋平和思想の受容」千葉 眞編著『平和の政治思想史』おうふう、2009年、108-110頁。
- (14) ヒーターは、ディオゲネスに関して次のように説明している。「シノベのディオゲネスは、桶 tub の中に住まうことによって、彼の哲学を象徴的に明示し、『私は『世界』の市民である』と述べることによって、言葉で以て彼の哲学を開示した。彼の手によって、kosmopolites（世界の市民）という言葉が作られ、我々の『世界市民』という言葉はそこに由来すると言ってよい。」Cf. D. Heater, *World Citizenship and Government : Cosmopolitan Ideas in the History of Western Political Thought*, London, 1996, p.7. また、次の文献も参照、山川偉也『哲学者ディオゲネス－世界市民の原像－』講談社、2008年。
- (15) 西洋と東洋における世界主義政治思潮の展開については、次の文献を参照。『政治思想史における平和の問題（年報政治学1992）』岩波書店、1992年。千葉 眞編著、前掲書。李朝末期における金允植の世界主義思想については、次の拙稿を参照。「金允植の初期政治思想（1）」『福岡大学法学論叢』第55巻第2号、2010年、282・326頁。
- (16) 日本への世界主義思想の導入について次の文献を参照。出原政雄『自由民権期の政治思想－人権・地方自治・平和－』1995年、法律文化社、223-299頁。
- (17) 出原政雄、前掲書、270頁。
- (18) ここで、植木枝盛と中江兆民の世界主義思想について見ておく。植木枝盛は、『板垣政

法論』（『植木枝盛集・第一巻』岩波書店、1990年）の中で、世界主義思想を披瀝している。枝盛は、本論において、「万国共議政府」の設置と「無上憲法」の定立を提唱しているが（参照、本集92頁）、斯様な制度構想は、世界主義へ向けての一階梯である旨を次のように説いている。「……共議政法ノ功ニ依テ遂ニ国ヲ解クニ至ルノ進歩ヲ得、今日ノ齟齬タル政治法律ノ如キハ便チ其生ヲ卒ヘテ人間能ク真成ノ自由自主ヲ得、純乎タル至美世界ニ訴樂スルコトヲ得ルニ至レバ、之ヲ最大利得ト云ハザラント欲スルモ得ン乎。」（本集、99-100頁）また別の個所では、此の制度構想の手段性について、次のように言っている。「……人民ヲシテ早く自由ノ頂上ニ登ルノ便路ヲ与フル所以ナルベク、都テ人民ヲシテ自由ノ真域ニ臻ラシムルノ階梯トナルベシ。」（本集、103頁）

次に、中江兆民について言及する。兆民は『三酔人経綸問答』の中で、「洋学紳士」に、世界主義・人類主義の思想を、「民主制」という言葉によって、次のように語らせている。「民主の制乎民主の制乎……精神と身体と有る者は皆人なり、敦れを欧羅巴人と為し敦れを亜細亜人と為さん、何ぞ況や英仏独魯をや、何ぞ況や印度支那琉球をや、……民主の制乎民主の制乎、其某甲国と云ひ某乙国と云ふは特に地球の部位を劃分して相呼ぶの便を計るのみ、居民の心意を隔障するに非ざるなり、世界人類の智慧と愛情とを一混して一大円相と為す者は民主の制なり、……」（『中江兆民全集・8』岩波書店、1984年、207-208頁。）

- (19) 次の文献を参照。遠山茂樹、前掲論文、150-158頁。本田逸夫、前掲論文、911-924頁。
- (20) 本田逸夫は、中国に於ける世界主義思想の源流の一事例として、『論語』の「顔淵篇」に出てくる「四海之内皆兄弟也」という文章を引き合いに出している。前掲書、194頁。
- (21) 羯南は、「ラクロワ」なる人物について、「其の Nouveau Cynée といふ書に於て国際常置委員会の創設を唱へ……」（1-199）と説明している。しかし、ヒーターの書物によると、此の書は、フランスの修道士、エメリック・クルーセ（Émeric Crucé）によって、1623年（あるいは1624年）に出版され、そのフル・タイトルは、英訳すると、The New Cyneas or Political Discourse Expounding the Opportunities and Means for Establishing General Peace and Freedom of Trade Throughout the World. であった。ヒーターはクルーセの書物の当時としては、法外な考察対象の広さについて、次のように言っている。「クルーセは、彼の構想の中に全世界を含めた。それは17世紀の読書人にとっては、恐らく、関心の及ばないユートピア的な規模の計画であった。」（Cf. D. Heater, *ibid.*, p.65.）
- (22) 参照、千葉 眞編著、前掲書、108-109頁。

- (23) 明治期の人物に関しては、福沢諭吉の英学、中江兆民の仏学、加藤弘之の独学などに代表されるように、各人の「模範国」に拠った呼称がある。勿論、三人の思想的素養は字義通りの枠内に限られた者ではない。羯南の場合も、否、羯南の場合は、別して、その様に言えると考ええる。彼はプリュンチュリー、シュタール、シュルチェなどに多くを学んだので、一般に、独学者と見られている。しかし、彼が修めた主たる外国言語は仏語であった。羯南は、明治10年前後に司法省法学校に在籍したが、当校の授業はフランス語で行われた。参照、有山輝雄『陸 羯南』吉川弘文館、2007年、25頁、松田宏一郎『陸 羯南』ミネルヴァ書房、2008年、13頁。次に、明治10年代後半期の官僚生活の折りには、太政官文書局の翻訳課仏文掛に在籍した。参照、鈴木栄樹『『官報』創刊過程の史的分析－日本における近代国家の形成と法・情報－』山本四郎編『日本近代国家の形成と展開』吉川弘文館、1996年、130頁。三番目に、次のメーストル本の翻訳作業が挙げられる。
- (24) 私は、関西日仏学館（京都市）の御厚意によって、*Œuvres complètes de Joseph de Maistre (tome premier)* に収録されている、本訳書の原本に当たることが出来た。改めて、感謝の意を表したい。なお、下の原文末尾に付した頁数は、上記全集における該当頁を示している。
- (25) 原文は次の通りである。C'est une manie étrange de l'homme de se créer des difficultés pour avoir le plaisir de les résoudre. . . . Ainsi, par exemple, on a longuement disputé sur l'origine de la société ; et au lieu de la supposition toute simple qui se présente naturellement à l'esprit, on a prodigué la métaphysique pour bâtir des hypothèses aériennes réprouvées par le bon sens et par l'expérience. (p.315)
- (26) 原文は次の通りである。Toute question sur la *nature* de l'homme doit se résoudre par l'histoire. Le philosophe qui veut nous prouver, par des raisonnements à *priori*, ce que doit être l'homme, ne mérite pas d'être écouté : il substitue des raisons de convenance à l'expérience, et ses propres décisions à la volonté du Créateur. (p.316)
- (27) ルソーは、『人間不平等起源論』の最初の所で、自然状態論が、思惟上の産物である旨を次の様に説明している。「・・・すべての事実を捨ててかかろう。われわれがこの主題に関していかなる研究にはいりこもうと、それは歴史的真理ではなく、ただ憶想的で条件的な推理だとおもわなければならない。そうした推理は、事物の真の起原を示すよりも事物の自然を示すのにいっそう適切なのである。」(J. J. Rousseau, *Discours sur l'origine et le fondements de l'inégalité parmi les Hommes*, introduction et notes De Angèle Kremer-Marietti, Paris, 1973, p.62-63. 本田喜代治・平岡 昇訳『人間不平等起

- 原論』岩波書店、1957年、36頁）ルソーは、自然状態論は、「事実」や「歴史的真理」ではなくて、「推理」によって人為的に導出された「事物の自然」つまり、人間の当為・理想如何について展開したものである次第を指摘しているのである。
- (28) J. J. Rousseau, *ibid.*, p.105. なお、「真の必要」という言葉は、私訳を試みたものである。その次第については、次の拙稿を参照。「陸 羯南における国民主義の制度構想（九）」『福岡大学法学論叢』第56巻第1号、2011年、68頁。
- (29) 松永昌三によれば、中江兆民も、ルソーの著書 *Discours sur les sciences et les arts*, 1750を『非開化論』と題して刊行し、その「反文明論」＝自然状態論に対して共鳴を示していた次第を指摘している。兆民は、ルソーから「蛮夷はむしろ自然で純朴、文明は人為で邪悪だとの見方があることを学んでいた・・・。」そして、「天巧（自然状態－筆者）」と「人作（文明状態－筆者）」の峻別と前者の世界への共鳴は、「中江の思想となった」とされている。（参照、『福沢諭吉と中江兆民』中央公論新社、2001年、139-140頁。）この訳書は、『中江兆民全集・第一巻』（岩波書店、1983年）の201-237頁に収録されている。なお、最近、朴鴻圭は、中江兆民の「平和理念」の構想は、ルソーよりも寧ろ孟子に負っているという見方を提起している。参照、「中江兆民の平和理念と孟子」朴忠錫・渡辺浩『「文明」「開化」「平和」－日本と韓国－：日韓共同研究叢書16』慶應義塾大学出版会、2006年。
- (30) なお、ルソーが世界主義思想そのものを正面から取り上げた論考としては、「サン＝ピエール師の永久平和論抜粋」や「永久平和論批判」などがよく知られているが、羯南はこれ等の論稿には触れていない。此の二論稿については、関連論稿とともに、宮治弘之の訳業と解説が『ルソー全集・第4巻』（白水社、1978年）に収録されている。
- (31) 安藤昌益の発見者、狩野亭吉が昌益を世に紹介したのは、羯南が没した翌年（明治41）年であった。参照、和田耕作『安藤昌益の思想』甲陽書房、1989年、360頁。寺尾五郎『先駆 安藤昌益』徳間書店、1976年、26頁。なお、ルソーと安藤昌益の比較を試みた最近の文献として、次のものがある。小宮 彰「安藤昌益とジャン＝ジャック・ルソー－文明論としての比較研究」『デイドロとルソー 言語と《時》－18世紀思想の可能性－』思文閣出版、2009年、第7章。更に羯南は、天皇・神道思想の中にも、世界主義に適う要素が存在している旨を次のように書いている。「若し我国の政論家及び政事家が万国平和、四海兄弟の仁道を取りて諸外国人に接せんとすれば、是れ非常の偉業なり。六合を包ね八紘を掩ふの皇旨に遵ふもの、吾輩豈に賛して而して頌せざらんや。」（1-200）
- (32) 遠山茂樹は、「羯南の国民主義は・・・四海兄弟主義の意義を認め、それを排除しない

とした」(前掲論文, 153 頁)と指摘している。勿論此の指摘は、正鵠を失っているわけではない。しかし、羯南の「四海兄弟主義」の背後にルソーの自然状態論が存在している次第を勘案すると、羯南における文明史を前提とした歴史主義の性格を持つ国民主義と合理主義の観点から作られた「四海兄弟主義」の二つの観念は、自覚的に区別される異質の者であると捉えるべきだと思う。

- (33) 吉岡知哉はルソーの平和思想が、自然状態と社会状態の峻別を説いた『人間不平等起源論』を前提にして、社会状態の人間を前提に組み立てられたサン＝ピエール師の平和思想に対する批判を通して表明されていると指摘している。そして、ルソー平和思想の基本的性格について簡潔に、「プラトンの表現を借りれば、『ことばのうえで平和をたてる』試みであった」と結論付けている。参照、「ルソー－狂人たちのただなかで－」『政治思想史における平和の問題（年報政治学 1992）』岩波書店, 1992 年, 50 頁。
- (34) 以下の叙述において、李朝末期の歴史展開に関わる事柄に言及するに際しては、次の通史的書物を参看している。海野福寿『韓国併合』岩波書店, 1995 年。木村 幹『高宗・閔妃』ミネルヴァ書房, 2007 年。旗田 巍『朝鮮史』岩波書店, 2008 年（初出は 1951 年）
- (35) 14 世紀以来、バルカン半島、北アフリカ、小アジア等の諸地域に繁栄を誇ったオスマン帝国は、19 世紀に入って衰退の度を強め、その支配下にあったギリシア、エジプトを初めとする諸民族が独立闘争に立ち上がり、同時に、ロシア、イギリス、フランスなどの欧州諸帝国がそこに介入して勢力圏の拡大を謀って行った。参照、山内昌之『近代イスラームの挑戦（世界の歴史 20）』中央公論新社, 2008 年, 90-281 頁。林 佳世子『オスマン帝国 500 年の平和』講談社, 2008 年, 302-368 頁。君塚直隆『近代ヨーロッパ国際政治史』有斐閣, 2010 年, 229-294 頁。羯南は、斯様なこの地域の錯綜した国際政治の動向、所謂、「東方問題」に対して、朝鮮半島を焦点とする東北アジアの動向と重ね合わせて強い関心を寄せていた。全集本の（1-167）、（1-399）、（2-423）、（3-193）、（4-675）などを参照されたい。
- (36) 日清戦争期における朝野両領域の政治的・思想的な国民総動員の体制の出現については、岡義武や丸山真男による古典的研究以来、多くの文献で指摘されて来た。参照、岡義武「日清戦争と当時における対外意識」『岡 義武著作集・第六巻（国民の独立と国家理性）』岩波書店, 1993 年（初出は、『国家学会雑誌』第 68 巻 3・4 号：5・6 号, 1954・55 年）丸山真男『明治国家の思想』『丸山真男集（第 4 巻：1949-1950）』岩波書店, 1995 年, 72-81 頁（初出は、歴史学研究会編『日本社会の史的究明』岩波書店, 1949 年。）

- (37) 伊藤之雄は、日清戦争までの羯南の朝鮮論を次のように評している。「陸は、清国に対して日本の国力が勝っていると自信をもつようになり、日本人が中心となって朝鮮を指導することを提案した・・・陸は東学党の乱（甲午農民戦争）に対して・・・『居留民の保護又は京城廷の救援に止まらず、進みて東洋の均整をも期せざるべからず』と、朝鮮における日本の影響力の拡大をめざした。」「日清戦争前の中国・朝鮮認識」古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』緑蔭書房、1996年、153頁。また、芝原拓自も、次のように指摘している。『『国権』と消長をともしする『国民主義』＝『ナショナリチー』の發揮を説く陸羯南による、論説『高麗半島の現状』・・・などは、朝鮮をめぐるすでに牢乎となりつつあったまさに『国民』的な国権意識の、すなおな表出としての干涉容認論だったかもしれない。』芝原拓自「解説 対外観とナショナリズム」芝原拓自・猪飼隆明・池田正博編『対外観（日本思想体系12）』岩波書店、1988年、529-530頁。
- (38) 羯南は、東学党に関する論評より前にも、論説、「朝鮮論、韓商の愁訴」を書き、朝鮮商人の日本人の商業活動に対する非難の声に、一定の理解・共感を示している。「吾輩は深く朝鮮人民の為に同感情を牽起さざるを得ざるものあり。・・・説頗る理に反する所ありと雖も、情固より悲しむべきものあり。」（2415～416）
- (39) 参考のために、他の明治人の東学党に対する見方を列挙してみたい。先ず、福沢諭吉は東学党の蜂起に際して、明治27年5月、論説、「朝鮮東学党の騒動に就て」を發表し、その中で、東学党を「烏合の衆」或いは「賊徒」・「暴徒」と称し、「其勢頗る猖獗なるが如し」と評している。参照、『福沢諭吉全集・第14巻』岩波書店、1961年、386～387頁。但し、彼も閔氏一族の「罪惡」を糾弾することを忘れてはいない。参照、「閔族の処分に就て」同書、483～485頁。なお、丸山眞男は、福沢諭吉の朝鮮・中国観の推移の大略について、次の様に説明している。「彼の対朝鮮および中国政策論が、それらの国の近代国家への推転を促進して共に独立を確保し、ヨーロッパ帝国主義の怒濤から日本を含めた東洋を防衛するという構想から出発しながら、両国の自主的な近代化に対する絶望と、西力東漸の急ピッチに対する恐怖からして、日本の武力による『近代化』の押売りへ、更には列強の中国分割への割り込みの要求へと変貌して行く思想的過程・・・」（『福沢諭吉選集第四巻 解題』『丸山眞男集・第5巻』岩波書店、1995年、241頁。）福沢の東学党の扱いは、このような、朝鮮政策論の変貌が関係していると考えられる。なお、丸山が、福沢は「帝国主義の道徳的（傍点は筆者）粉飾のための美辞麗句」とは無縁であったと指摘している点を付け加えておきたい。（参照、上掲解題、240頁）さらに、一群の丸山福沢論に対する批判者は、斯様な丸山の指摘をどのように受け止めるのであろうか。

次に、竹越三又は、論説、「兵を朝鮮に出すべし」を書いて、その中で、次のように言っている。「請ふ彼の東学党の政綱なるものを見よ。君側の奸を清むと云ふかと思へば、洋倭を攘ふとも云ふ。其政綱なるもの区々にして一定せずと雖も、苟も我国にして朝鮮を扶植して東洋権力の平均を維持せんとせば、其の一大妨害物たるや即ち明か也。吾人は一万の居留人民を保護するは、勿論の事、東洋大局の打算よりして、朝鮮政府の請求によりては、兵を朝鮮に出して、以て乱賊を掃蕩し、一は朝鮮を内乱より救ひ、一は恩威を朝鮮政府に示すこと、英国が支那の内乱を清平して、以て其恩威を植へたるが如くせざるべからざる也。」（西田 毅編、前掲書、331 頁。）

三番目に、中江兆民については、小林瑞乃によって極めて消極的に評価されている。つまり、東学党の乱（甲午農民戦争）に関しては、田中正造がその「高い倫理性」に刮目し、『毎日新聞』が、「共感」を寄せた。それに対して、兆民の朝鮮論は、朝鮮を「他国との争奪戦」の対象として観る呈のものであり、農民軍に関しても、「兆民は、そうした彼等の『徳義』には心動かされなかったのであろう。農民軍に言及することなく、興味の対象になったかも疑問である。」と指摘している。参照、小林瑞乃『中江兆民の国家構想－資本主義化と民衆・アジア』明石書店、2008 年、230-231 頁。また、小林は、羯南の前掲の論説、「東学党の志を悲しむ」に触れて、彼が、「立憲政治という“理想”の有無から農民軍を論じていた」（前掲書、355 頁）と指摘しているが、私は、本論で述べた様に朝鮮国民主義の評価という観点から農民軍の運動を捉えたと考える。

- (40) 金允植に関しては、取りあえず、前掲の拙稿を参照。また、金宏集や魚允中については、拙稿の脚注（32）・（81）で言及している。なお、羯南は、論説「皇韓之関係」の中で、副島種臣の魚允中に関する批判的言辞をそのまま載せている（4-123～124）が、魚允中に関する詳しい情報に通じていなかったと考えられる。
- (41) 更に羯南は、27 年 7 月、日本政府の指導下に、朝鮮内治の改革が行われる事に決したことに際して、日本国民主義の暴走を戒める論説を二編、発表している。先ず、「実践躬行の必要」を書き、次のように述べた。

「彼に内政改革を勧めば之と同時に我亦た自国の内政改革せざるべからず。彼れに内政改革を促さば我れ亦た自国の改革を実行せざるべからず。・・・朝鮮をして永く我れを師表と為さしめんと欲せば、願くは我が国自らをして改革案を実行せしめよ。是れ実に先進国として自任する吾が国民の徳義的義務にあらずや。」（4-551）

次に、「朝鮮国政の改革」においても、同様の主張をより直截に語っている。

「我れ既に其の（朝鮮政府の－筆者）委任又は同意を得て改革せしめたる以上は、亦た朝鮮人に対して徳義上の責任なしとせず。故に改革其事にして充分の功を奏せずば、

我が国は朝鮮人より排斥せられんのみ。……朝鮮の文化は自ら朝鮮の文化ありて其の人心亦た自ら其人心ありとすれば、徒らに法令文章を以て之を経緯せんことは吾輩其の謬柱鼓琴たるを知る。最も必要なるは彼れ官民をして此の改革を歓迎せしむるの道を講ずるに在り。」(4566～567)

- (42) 植手通有「解説－日清戦争後における陸 羯南－」『陸 羯南集（近代日本思想大系・第4巻）』筑摩書房、1987年。遠山茂樹、前掲論文、164-173頁。小山文男『陸 羯南－「国民」の創出』みすず書房、1990年、158-321頁。本田逸夫、前掲書、227-329頁。額原義徳「日清戦後における陸羯南の対外政策論」『日本歴史（日本歴史学会編）』吉川弘文館、第541号、1993年。平塚健太郎「陸羯南と南アフリカ戦争－反『帝国主義』からの転換の契機として－」『現代史研究（現代史研究会編）』第48号、2002年。全旦煥「陸 羯南の国際観」西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房、1999年、314-326頁。胆紅「陸羯南と新聞『日本』のアジア論－日清戦争まで－」『国際公共政策研究（大阪大学）』第9巻第2号、2005年、331頁。有山輝雄、前掲書、176-275頁。朴 羊信、前掲書、59-195頁。松田宏一郎、前掲書、205-287頁。片山慶隆「陸 羯南の対外論－日清戦争後を中心に－」『日本史研究』第583号、2011年。例えば、羯南の日清戦争期の世界主義思潮に理解を示した遠山茂樹も、日露戦争への歴史過程における朝野の両領域における帝国主義思潮の蔓延に抗し切れず、彼の世界主義は「破綻のとどめを刺され」たと指摘している（前掲論文、173頁）。植手通有は、「日清戦争後の一時期に羯南は平和主義を強調して、軍国主義・帝国主義を批判したにもかかわらず、日露の風雲が高まるとこの面をかたんにすてさっ」たと述べている（前掲書、512頁）また、朴羊信は、日清戦争前の「防衛的国民主義」の立場から、徐々に、「侵略的国民主義」の世界へと移っていったと指摘している（前掲書、56-58頁）。さらに片山慶隆も、羯南の義和団事件後の満州問題への対応に関して、「単純に侵略的と言い切ることは出来ない」と指摘すると共に、朝鮮については、「日本の勢力圏として絶対に妥協出来ない存在と位置づけた」と述べている（前掲論文113-114頁）。
- (43) 羯南は、世界主義の立場から、朝鮮国民主義に理解・共感を示したのであるが、同様に、中国国民主義に対しても、理解・共感を示している。羯南は、日清戦争の後、1898年、中国の康有為や梁啓超らの変法派が明治維新に学んで、光緒帝と共に起した戊戌政変を支持し、西太后陣営の策謀によってそれが挫折した次第を糾弾する論説を書いた。先ず、論説、「燕京の政変」では、戊戌政変に関して、「支那大陸四億の生霊が新空気を呼吸して天賦の性能を発揮するに至らんことは、復た絶望の事に非らんとす」と書

き、この「鴻業」が挫折に帰したことは、「支那人民（傍点は筆者）の不幸」であると断じた（参照、6-131）また、論説、「清国皇帝の危難」においては、西太后一派の「残忍刻薄の事」を糾弾し、日本政府は「世界（傍点は筆者）仁道」の立場から、「此の酸鼻事態」を座視すべきではないと主張している（参照、6-143～144）なお、羯南の中国認識を扱った論稿として次の文献がある。山口一之「陸羯南の外政論－義和団事件と善後策－」『駒沢史学』第35号、1986年。李 向英「陸羯南の対清認識－日清提携論から支那保全論へ－」『史学研究（広島大学史学研究会）』2004年、243号。羯南は、同様に、日露戦争期におけるロシアの「革命党」の運動にも共感の意を示している。彼はその点に関連して、二つの論説、「露国自由の友（外国に於ける露国の立憲制度扶植運動）」と「露国の革命党（世の誤解を解く）」を書いている。前者においては、露帝国における「官吏政治」・「独裁政治」の「専制」が批判され、「吾人は露国一億三千万の民衆に同情を有するが為に、彼等の為に立憲制度を扶植するの挙に賛成する」と述べられている（参照、8-317～318）。また、後者においては、次のように書かれている。「・・・現在の露国は、数百年來の侵略政策に媒して起りたる官吏の露国にして、国民の露国にあらず。今や露国は無比の圧制国として世界に紹介せらると雖、露民の露国は別に存するあり。・・・今の官吏政治は国に生じたる寄生物なり。彼等は腐敗物の上に於ける蠅の如く存在す。革命党は露民の精神を存する者なり。彼等は自由思想を懐ける慷慨家に過ぎず。・・・革命党は自由の精神がスラブの脳底に潜在するを認めて、之れを覚醒するに満足する者なり。」羯南は、19世紀ロシアの国民主義者であった、スラヴ派の人々の言い草を髣髴とさせる言辞によって、「革命家」こそ「真誠に露国を愛する者」と称揚している。（参照、8-323）。

- (44) 羯南は、此の論説では、再び、26年段階と同じく、同党を「匪徒」（4-697）と称するに至っている。そこには、山田昭次が『毎日新聞』に関して指摘した「態度の変化」と同様の事態が起こったのかも知れない。参照、『植民地支配・戦争・戦後の責任－朝鮮・中国への視点の模索』創文社、2005年、102～104頁。東学農民軍が日本軍に対する攻撃に転じた段階で、日本国民主義者、羯南の側面が前面に出てきたことは考えられることである。それでも猶、彼は「東学党なるものは是れ百姓一揆のみ。百姓一揆は不安心より起る。何故に韓廷は先ず此の不安を医せざるや。何故に吾が帝国は韓廷を扶けて先ず此の不安心を医せしめざるや。」（4-696～697）と述べているのである。なお、明治27年9月以降の東学農民軍と日本軍の衝突の経緯については、次の文献を参照。趙景達『異端の民衆反乱－東学と甲午農民戦争－』岩波書店、1998年、289-326頁。

- (45) 遠山茂樹、前掲論文、161頁。

- (46) 柄谷行人は、カントに拠る「理性の統整的使用」と「理性の構成的使用」という二つの思考態度について次のように説明している。「・・・理性を構成的に使用するとは、ジャコバン主義者（ロベスピエール）が典型的であるように、理性にもとづいて社会を暴力的に作り変えるような場合を意味します。それに対して、理性を統整的に使用するとは、無限に遠いものであろうと、人がそれに近づこうと務めるような場合を意味するのです。たとえば、カントがいう『世界共和国』は、それに向かって人々が漸進するような場合を意味するのです。』『世界共和国』岩波書店、2006年、183頁。また、次の文献も参照。柄谷行人『世界史の構造』岩波書店、2010年、431-465頁。
- (47) 例えば羯南は、陸奥宗光の条約改正作業に抗して展開された対外硬運動の一翼を担い、内地雑居尚早論を唱えたが、それに対して、明治政府と政府を支持した自由党は、「頑固攘夷」の徒であると批判した。羯南は斯様な対外硬運動に対する批判に対して、政府や自由党が、西洋人と東洋人を差別している点を批判していく。「朝に在る者及び野に在る者は欧米と共に同方針を取り、以て支那人を排斥するなり。彼等は排他自衛の思想を支那人に向ひて応用するの状あるに、吾輩今ま同一の思想を外国人に応用せんと言へば、則ち彼等相ひ率ひて頑固攘夷なりと罵る。豈に奇怪の極にあらずや。・・・其の言論及政策に観れば、則ち欧米人と膝を交えて東洋人に背を向くるが如きあるは抑々何の心ぞや。」(1-204) 羯南は、対外硬運動を「頑固攘夷」と罵る者達が、世界主義の立場を放擲して西洋人と東洋人の間に二重の基準を設けて、両者を差別していることを批判するのである。
- (48) 参照、高松亨明『陸羯南詩通釈』津軽書房、1981年、196頁。羯南は漢学・漢詩の手ほどきを、彼の若き時代の師であった津軽藩儒の工藤他山（1818-1889）から受けた。「羯南」という雅号は、羯南が、ロシアの南下に抗して詠んだと考えられる「風濤自隸羯南来」という漢詩が他山から称賛されたことが切っ掛けになったと言われている。参照、有山輝雄、前掲書、14頁、松田宏一郎、前掲書、6頁。なお、他山の残した文章は、子息、外崎 覚によって編纂され、『他山遺稿』と題して明治31年、編纂刊行されている。私は同書を入手しているのであるが、残念ながら、本稿で活用することは出来なかった。また、同書の中には、羯南の追悼文、「悼他山先生拜序」が収録されていて、その中で彼は他山を「経術一州真博士」と讃えている。参照、同書、附録、2-3頁。